

伏図

特記無き限り下記とする。  
 1. 室外機基礎及び防音壁の位置は、意匠図による。  
 2. ※印付寸法は、意匠図参照。

基礎リスト

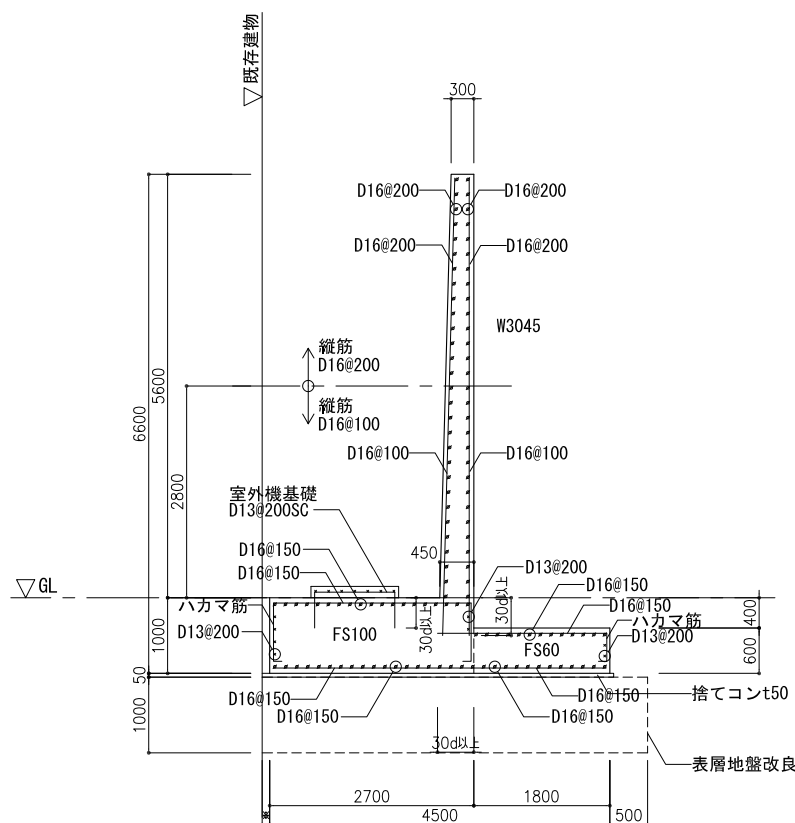
記号	厚	位置	主筋(短辺)方向		配力筋(長辺)方向		備考
			端部	中央	端部	中央	
FS100	1000	上端筋	D16 @150	←	D16 @150	←	
		下端筋	D16 @150	←	D16 @150	←	
FS60	600	上端筋	D16 @150	←	D16 @150	←	
		下端筋	D16 @150	←	D16 @150	←	

特記無き限り下記とする。  
 1. コンクリートは、 $F_c=24N/mm^2$ 、スランプ $S=15$ とする。  
 2. 鉄筋材種は以下とする。  
 D16以下：SD295  
 3. 基礎下地業は、表層地盤改良 $t=1000mm$ とする。  
 セメント系固化材(六価クロム対応型)添加量は、 $100kg/m^3$ とする。  
 固化材添加量は、配合試験を行い決定する。  
 4. 基礎下地盤の確認を行い、表層地盤改良下で平板載荷試験を実施する。設計地耐力は $70kN/m^2$ (長期)とする。

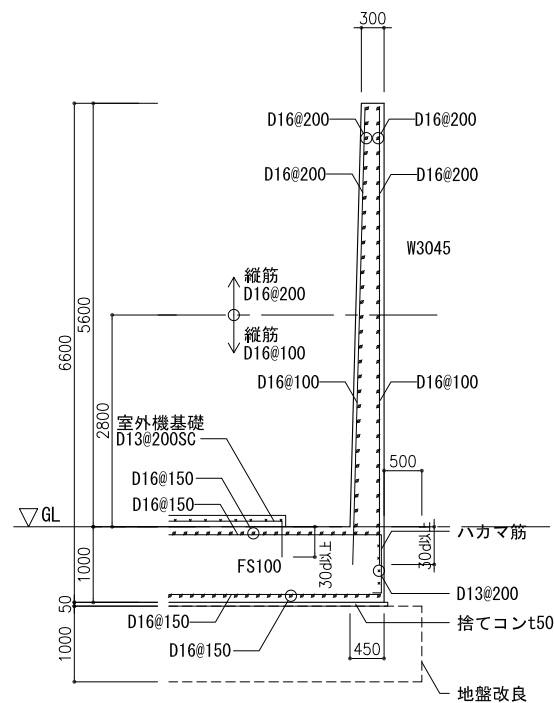
壁リスト

符号	壁厚		縦筋			横筋		備考
			上部	中央	下部	端部	中央	
W3045	300~450	外側	D16 @200	D16 @200	D16 @100	D16 @200	D16 @200	
		室外機側	D16 @200	D16 @200	D16 @100	D16 @200	D16 @200	

特記無き限り下記とする。  
 1. コンクリートは、 $F_c=24N/mm^2$ 、スランプ $S=15$ とする。  
 2. 鉄筋材種は以下とする。  
 D16以下：SD295



A矢视图



B矢视图

# 総則

- ## 適用範囲
- 本規準図は設計図（建築図、構造図）のコンクリート造部分に適用する。
  - 現場説明事項、質疑応答書、特記仕様書および本構造図に記載のない事項はこの規準図による。
  - 本規準図と他の設計図との間に疑義が生じた場合は監理者の指示による。
  - 本図を含む構造図の書入れ寸法は特記のない限りmm単位とする。
  - 本規準図は下記に示す材料を対象とする。  
コンクリート：設計基準強度 18N/mm<sup>2</sup>以上、36N/mm<sup>2</sup>以下  
鉄筋：SD295、SD345、SD390、溶接金網
  - 本図および構造図などで配筋方法が不明の場合は、「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説」（最新版）（日本建築学会編）並びに「JASS 5 鉄筋コンクリート工事」（最新版）（日本建築学会編）に準じ、監理者と協議の上配筋方法を定める。
  - 前項 6.によって生じた変更は「共通特記仕様書」に示す「軽微な変更」とする。

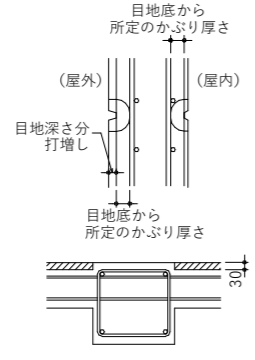
# 鉄筋のかぶり厚さ

鉄筋のかぶり厚さは下表を標準とし、鉄筋組立後のかぶり厚さは「標準仕様書」表 5.3.6 「最小かぶり厚さ」※1 を確保すること。  
最小かぶり厚さは標準かぶり厚さ-10mmとする。

表1 鉄筋の標準かぶり厚さ

構造部分の種別			標準かぶり厚さ※2	
土に接しない部分	スラブ、耐力壁以外の壁	仕上げあり	30	
		仕上げなし	40	
	柱、梁耐力壁	屋内	仕上げあり	40
			仕上げなし	40
		屋外	仕上げあり	40
			仕上げなし	50
擁壁、耐圧スラブ			50	
土に接する部分	柱、梁、スラブ、壁		50	
	基礎、擁壁、耐圧スラブ		70	
煙突等高温を受ける部分			70	

- この表は、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートには適用しない。また、塩害を受ける恐れのある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。
- 「仕上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ（仕上塗材、塗装等）のものを除く。
- スラブ、梁、基礎及び擁壁で、直接土に接する部分のかぶり厚さは、捨コンクリートの厚さを含まない。
- 杭基礎の場合の基礎下端筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。
- 打継ぎ目地及びびびり割れ誘発目地部分の鉄筋のかぶり厚さは右図の様に目地底から所定のかぶり厚さを確保すること。
- RC造で柱と梁が同一面の場合は、右図の様に梁幅を30mm増打ちとする。柱又は梁の主筋にD32以上の太径鉄筋を用いる場合は別途定める。
- 同一部材において必要かぶり厚さが異なる場合、かぶり厚さの取り方は施工図等で十分検討する。



※1 最小かぶり厚さ：建築基準法施行令に規定されたかぶり厚さ。屋外側（仕上げなし）については耐久性の観点から10mm増したかぶり厚さ。  
※2 標準かぶり厚さ（設計かぶり厚さ）：施工後誤差の割増10mmを標準として見込むことにより、打設後最小かぶり厚さを下回る危険性を少なくするように、設計時点で考慮したかぶり厚さ。

# スペーサー

スペーサーは特記のない場合は表2を標準とする。

表2 スペーサーの使用区分

部位	床版	梁	柱
種類	鋼製 コンクリート製	鋼製 コンクリート製	鋼製 コンクリート製
数量 または 配置	上端筋、下端筋 それぞれ 間隔は0.9m程度 端部は0.1m以内	間隔は1.5m程度 端部は0.5m程度	上段は梁下より0.5m程度 中段は上段より1.5m間隔程度 柱幅方向は1.0m以下2個 1.0m超え3個
備考		上または下いずれかと 側面の両側へ対称に設置	同一平面に点対称となる ように設置
部位	基礎	基礎梁	壁、地下外壁
種類	鋼製 コンクリート製	鋼製 コンクリート製	鋼製 コンクリート製
数量 または 配置	間隔は0.9m程度	間隔は1.5m程度 端部は0.5m程度	上段は梁下より0.5m程度まで 中段は上段より1.5m間隔程度 横間隔は1.5m程度 端部は1.5m程度
備考	基礎の四隅と柱の 四隅に設置	上または下いずれかと 側面の両側へ対称に設置	

- 梁、柱、基礎梁、壁及び地下外壁のスペーサーは側面に限りプラスチック製でもよい。
- コンクリート製はコンクリート強度30N/mm<sup>2</sup>以上とし、かつ設計基準強度以上とする。
- 断熱材打込み時のパーサポートは支持重量に対して、めり込まない程度の接触面積を持ったものとする。
- 鋼製スペーサーは、かぶり部分が防錆処理されていること。

# 鉄筋の折曲げ

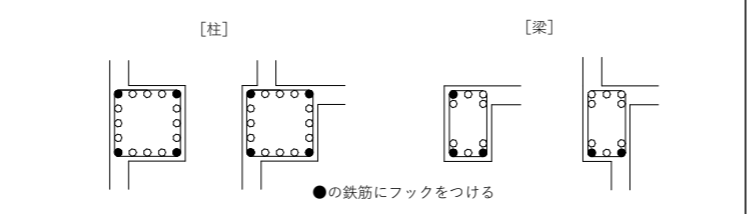
表3 鉄筋の折曲げ形状及び寸法

折曲げ角度	折曲げ図	折曲げ内法直径 (D)		
		SD295, SD345	SD390	
180°		D16以下	D19~D38	D19~D38
135°		3d以上	4d以上	5d以上
90°				
135° 及び 90° (幅止筋)				

- 片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90° フック又は135° フックを用いる場合には、余長は4d以上とする。
- 90°未滿の折曲げの内法直径は特記による。特記が無い場合は90°フックと同じとする。

次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にはフックを付ける。（フックは180°フックとする）

- 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合。
- 梁主筋の重ね継手が梁の出隅及び下端の両端にある場合。但し、基礎梁を除く。



- 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む）
- 杭基礎のベース筋
- 帯筋、あばら筋及び幅止め筋

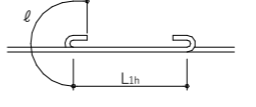
# 鉄筋の継手及び定着長さ

- 鉄筋の継手  
鉄筋の重ね継手の長さは次による。  
なお、径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。
- 柱及び梁の主筋並びに耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、建築工事特記仕様書（構造）鉄筋工事 3筋架構及び組立 0.3、継手及び定着c.及びd.による。
  - (1)以外の鉄筋の重ね継手の長さは、表4による。

表4 鉄筋の重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	L1 (フックなし)	L1h (フックあり)
SD295	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24, 27	35d	25d
	30, 33, 36	35d	25d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24, 27	40d	30d
	30, 33, 36	35d	25d
SD390	21	50d	35d
	24, 27	45d	35d
	30, 33, 36	40d	30d

- L1, L1h: 重ね継手の長さ及びフックあり重ね継手の長さ。
- フックありの場合の L1h は下図に示すようにフック部分 ℓ を含まない。
- 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。



フレア溶接継手の仕様は表5-1による。

表5-1 フレア溶接の形状

溶接のビード幅	鉄筋径 d	
	最小値	
10	6	
13	7	
16	8	

隣り合う継手の位置は表5-2による。ただし、スラブ筋でD16以下の場合及び壁筋の場合は除く。なお、先組み工法等で、柱、梁の主筋の継手を同一箇所には設ける場合は、特記による。

表5-2 隣り合う継手の位置

継手の種類	フックありの場合	フックなしの場合
重ね継手		
	$a \geq 0.5L_{1h}$	$a \geq 0.5L_1$
圧溶接継手・溶接継手		
	$a \geq 400\text{mm}$	$a \geq 400\text{mm}$ 、かつ $a \geq (b+40)\text{mm}$ 、又は、 $a$ は評定条件による。

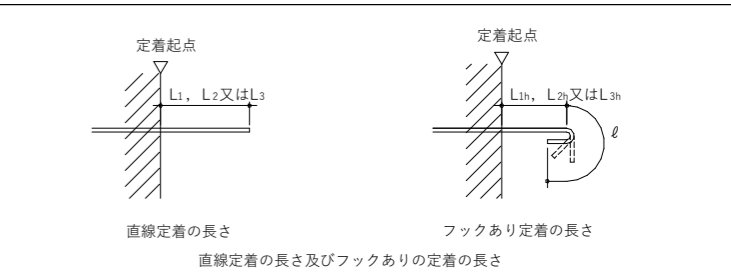
- 鉄筋の定着  
鉄筋の定着は表6による。

表6 鉄筋の定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	直線定着の長さ			フックあり定着の長さ		
		L1	L2	L3	L1h	L2h	L3h
SD295	18	45d	40d	小梁	35d	30d	小梁
	21	40d	35d	スラブ	30d	25d	スラブ
	24, 27	35d	30d		25d	20d	
	30, 33, 36	35d	30d		25d	20d	
SD345	18	50d	40d	10d	35d	30d	10d
	21	45d	35d	かつ	30d	25d	—
	24, 27	40d	35d	150mm	30d	25d	
	30, 33, 36	35d	30d	以上	25d	20d	
SD390	21	50d	40d	(25d)	35d	30d	
	24, 27	45d	40d		35d	30d	
	30, 33, 36	40d	35d		30d	25d	

梁主筋の柱内定着の投影定着長さはいずれの場合も柱せいの3/4倍以上とする。（ ）内は片持小梁及び片持スラブの場合。

- L1, L1h: 2から4, まで以外の直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ。
- L2, L2h: 割裂破壊のおそれのない箇所への直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ。
- L3: 小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐圧スラブ及びこれを受ける小梁は除く。
- L3h: 小梁の下端筋のフックありの定着の長さ。
- フックあり定着の場合は右上図に示すように、フック部分 ℓ を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。
- 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。



- 定着の方法  
仕口内に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さ ℓ が、表6のフックあり定着の長さを確保できない場合の折曲げ定着の方法は、下図により、次のイ、ロ及びハをすべて満足するものとする。

- 全長は、表6の直線定着の長さ以上とする。
- 余長は、8d 以上とする。
- 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さ La 及び Lb を表7に示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

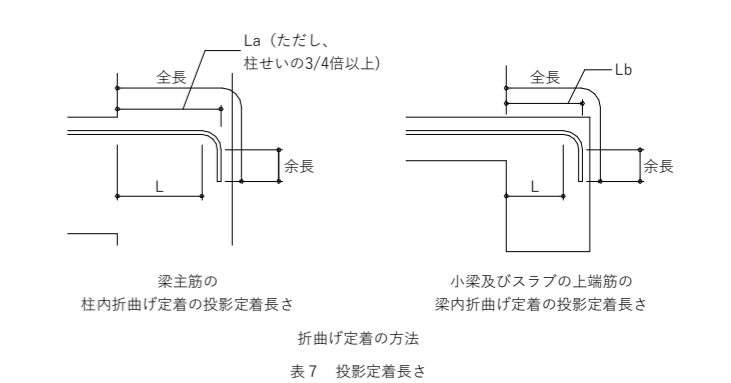
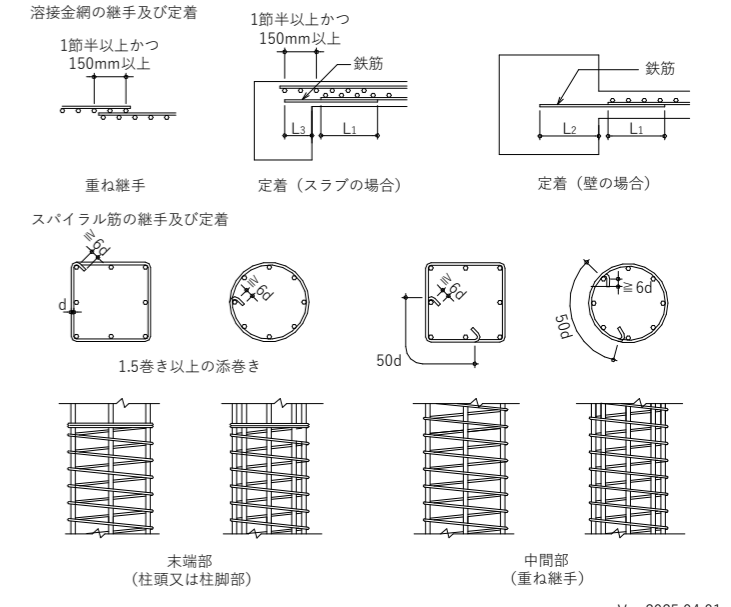


表7 投影定着長さ

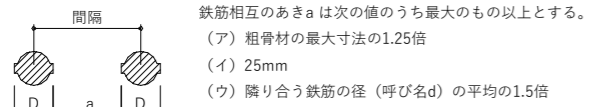
鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	La (ただし、柱せいの3/4以上)	Lb
SD295	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24, 27	15d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
SD345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
SD390	21	20d	20d
	24, 27	20d	20d
	30, 33, 36	20d	15d

- La: 梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ（基礎梁、片持梁及び片持スラブを含む）。
- Lb: 小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ（片持小梁及び片持スラブを除く）。
- 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。



# 鉄筋のあきと鉄筋間隔

## 1. 鉄筋相互のあき及び間隔

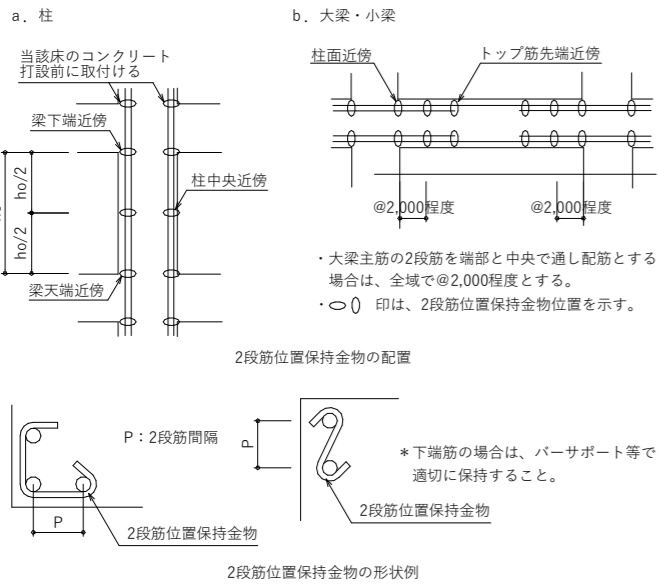


鉄筋相互のあきaは次の値のうち最大のもの以上とする。  
 (ア) 粗骨材の最大寸法の1.25倍  
 (イ) 25mm  
 (ウ) 隣り合う鉄筋の径(呼び名d)の平均の1.5倍

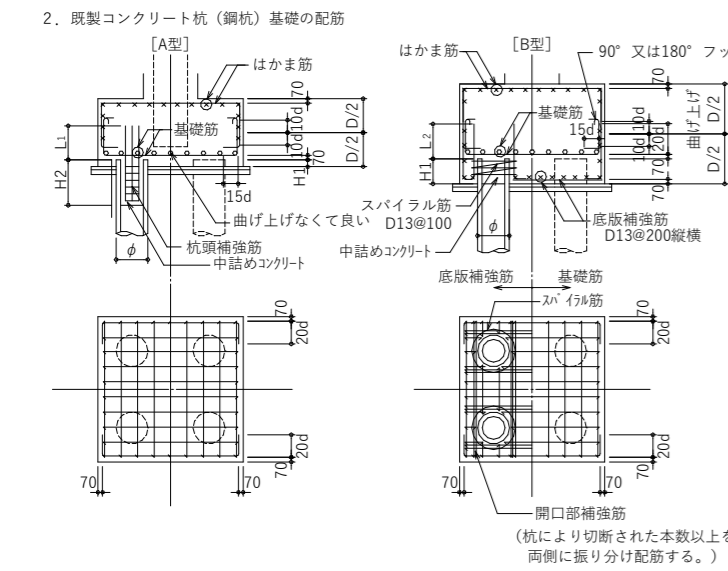
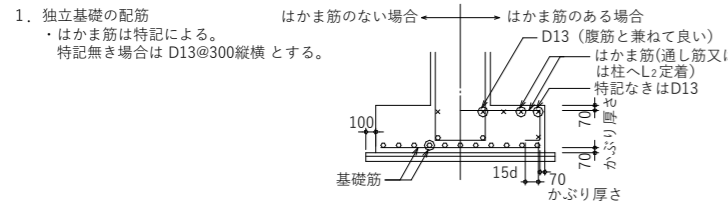
D: 鉄筋の最大外径  
 特記なき場合、鉄筋の間隔は下表による。

呼び名	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32	D35	D38	D41
最大径 D	14	18	22	26	29	33	37	40	43	47
aの最小値	32	32	32	33	38	44	48	53	57	62
最小鉄筋間隔P	46	50	54	59	67	77	85	93	100	109

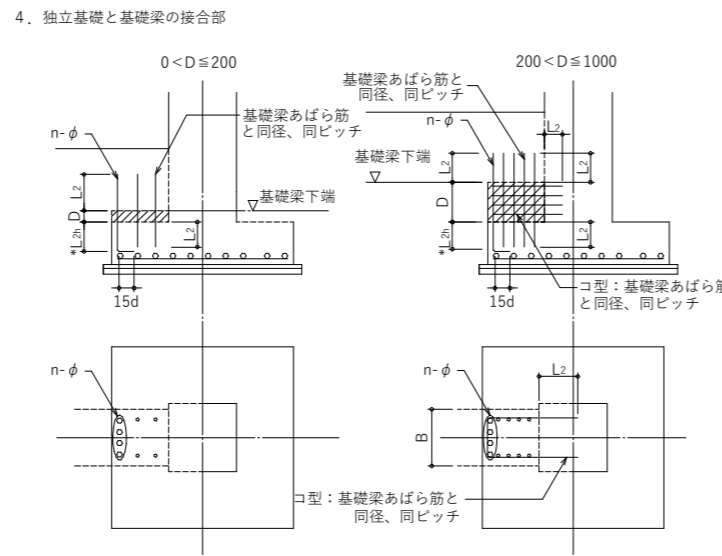
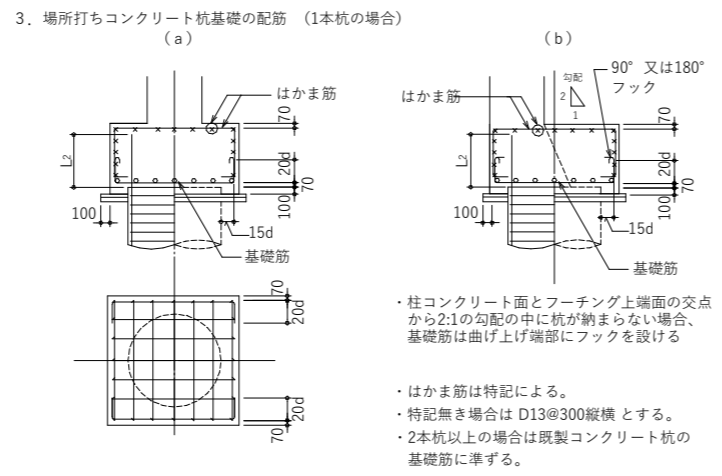
- ・間隔保持具に既製品を使用する場合は最小鉄筋間隔を用いて選定すること。
  - ・粗骨材の最大寸法が、25mmの場合を示す。
2. 2段筋位置保持金物の形状および配置  
 ・2段筋がある場合は、原則として2段筋位置保持金物を下図にない取付けること。



## 基礎の配筋要領

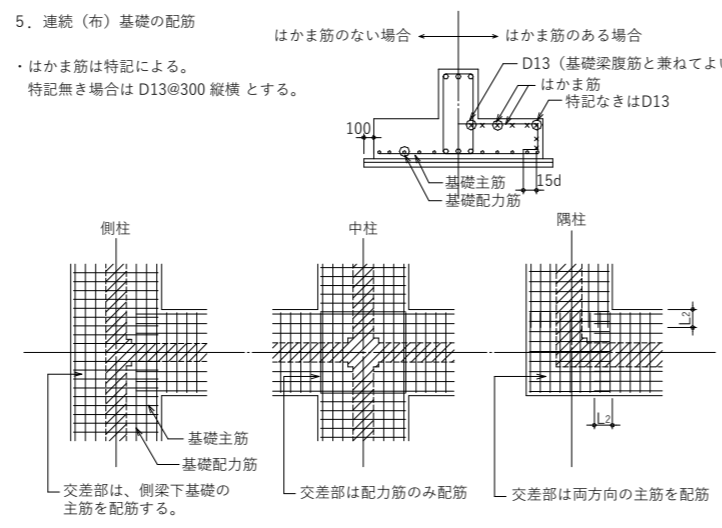


- ・1本杭の場合は場所打ち杭の基礎筋に準ずる。
- ・A型、B型の採用は特記による。
- ・はかま筋は特記による。特記無き場合はD13@300縦横とする。
- ・中詰めコンクリートは基礎と同じ調合のコンクリートを使用する。
- ・[A型] 杭頭補強筋の仕様、径、本数は特記による。杭頭埋込み深さH1、中詰めコンクリート深さH2は特記による。
- ・[B型] 杭頭埋込み深さH1は特記による。特記無き場合は杭径φとする。

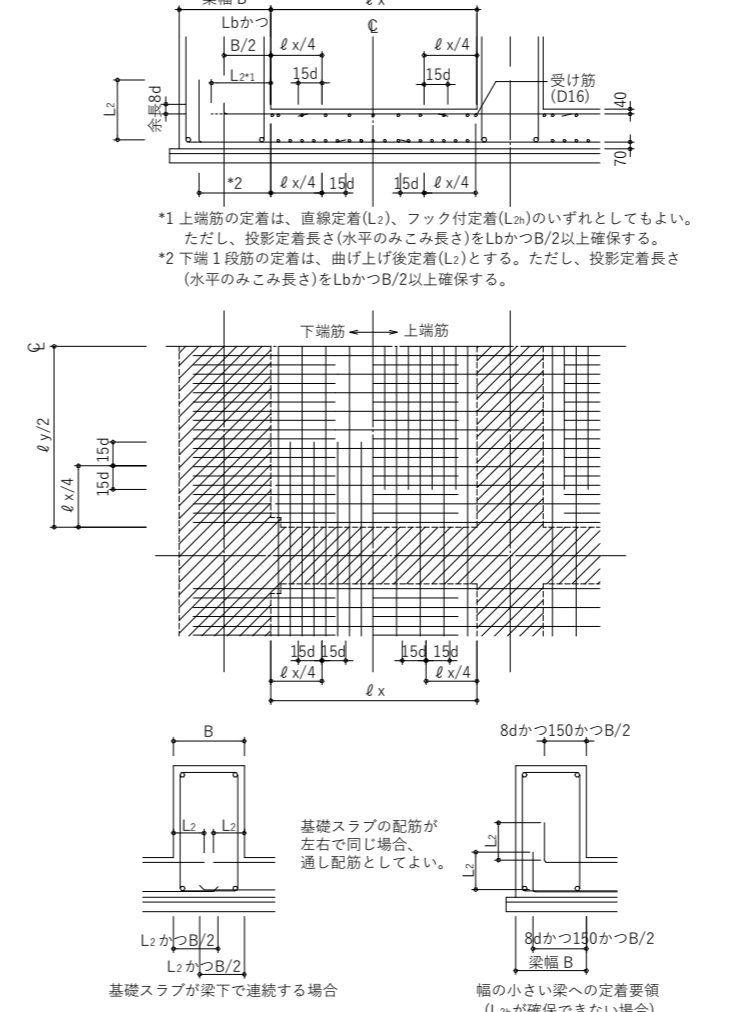


・補強筋 n-φ は特記による。特記無き場合は右表による。  
 ・D=0の場合、補強筋 n-φ を配筋する。  
 ・D>1000の場合は特記による。  
 ・\*L<sub>2n</sub>を確保できない場合は、本図「鉄筋の継手及び定着長さ(3) 定着の方法」による。

梁幅 B	n-φ
B ≤ 500	3-D16
500 < B ≤ 700	4-D16
700 < B ≤ 900	5-D16

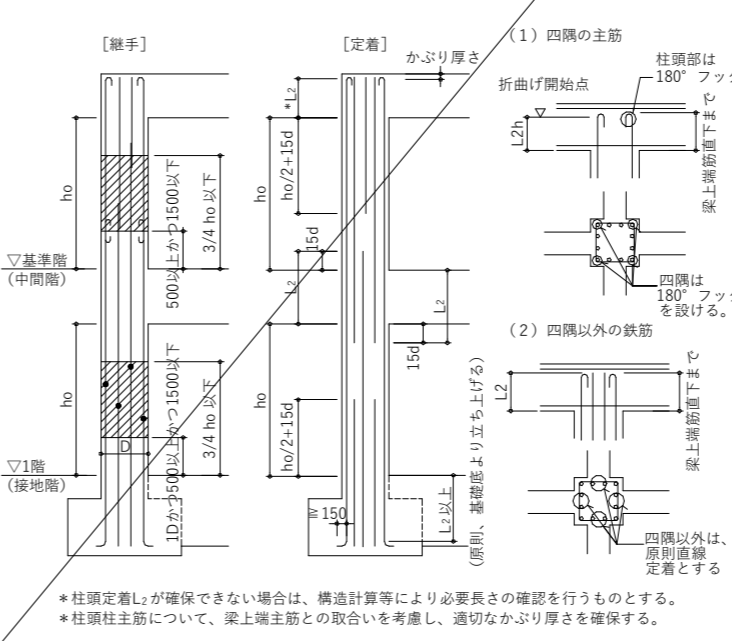


## 6. ベタ基礎の配筋

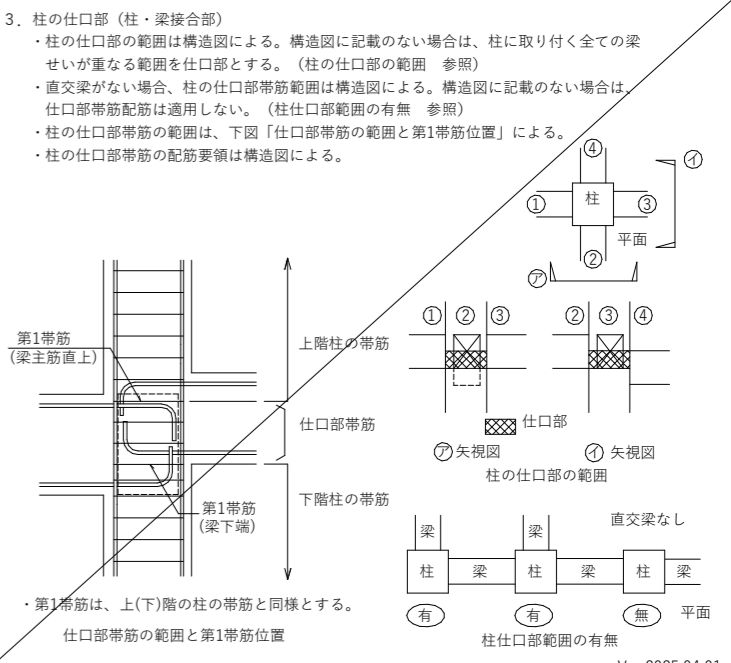
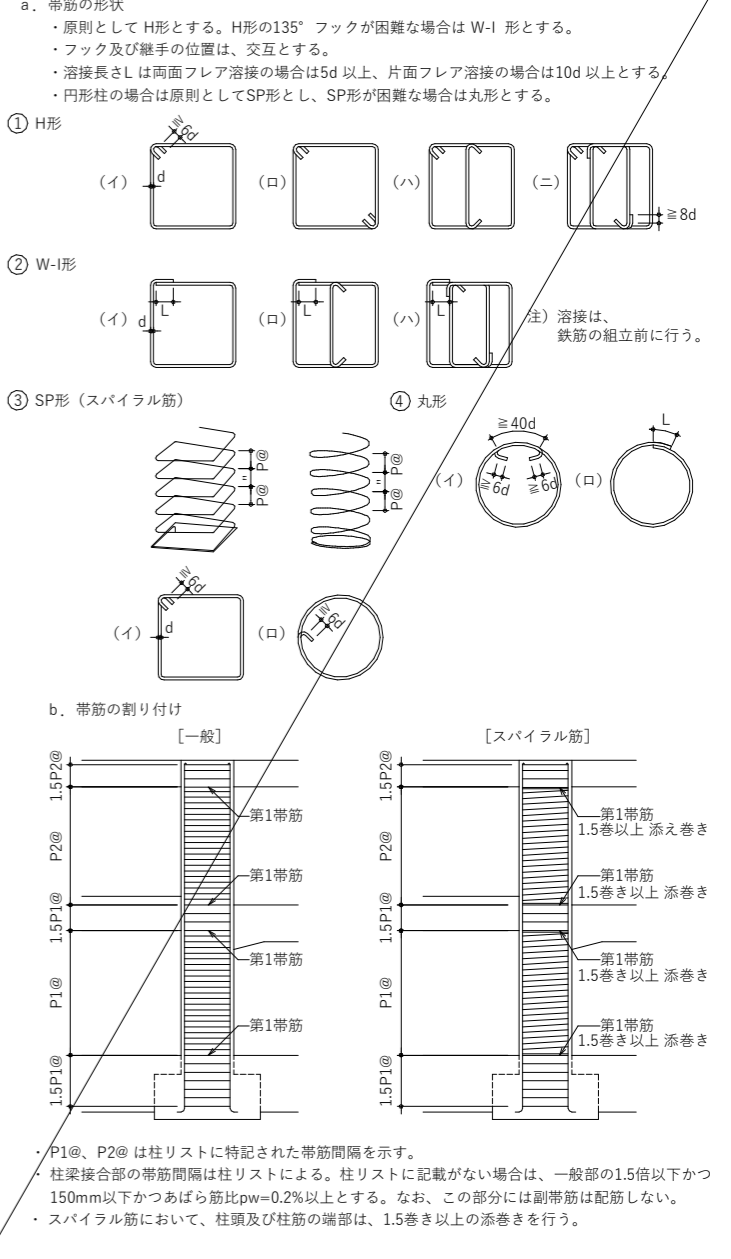


## 柱の配筋要領

1. 柱主筋の継手及び定着
- ・継手位置は下図とする。
  - ・但し、1階(接地階)柱脚の継手位置は1D(Dは柱せい)以上とする。基準階(中間階)の柱頭・柱脚に降伏ヒンジが生じる場合も同様とする。
  - ・施工上やむを得ず1段目の継手位置を1500mm以上とする場合は、監理者と協議する。
  - ・特記無き限り柱主筋の継手はガス圧接とする。
  - ・柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合には、フックを付ける。
  - ・隣り合う継手の位置は、表5による。

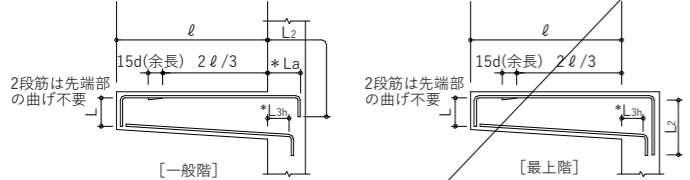


## 2. 柱の帯筋及び副帯筋



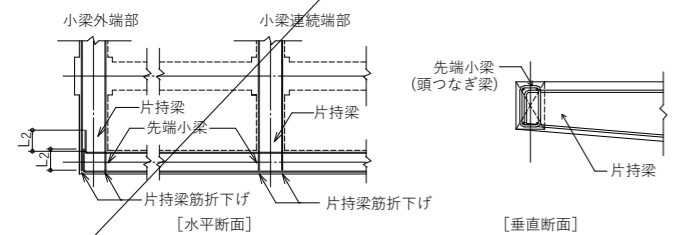
2. 片持ち梁主筋の継手, 定着及び余長

- a. 先端に小梁のない場合  
1. 先端に小梁のない場合



- ・先端の折曲げの長さLは、梁せいから被り厚さを除いた長さとする。
- ・\*Laの値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。
- ・\*Ldを確保出来ない場合は、本図「鉄筋の継手及び定着長さ(3) 定着方法」による。

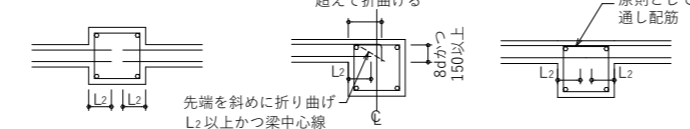
- b. 先端に小梁がある場合



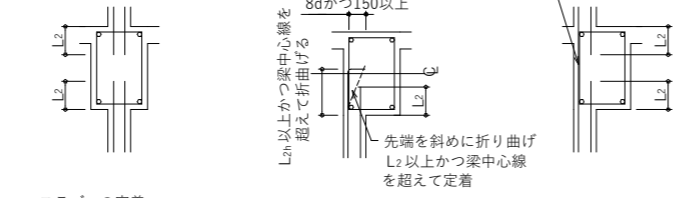
- ・先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
- ・先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

2. 定着

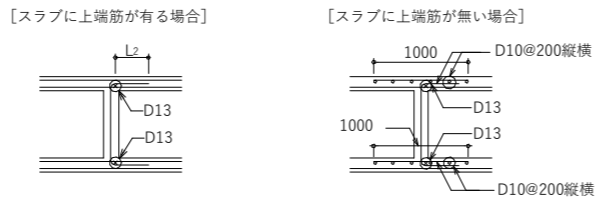
- a. 柱への定着



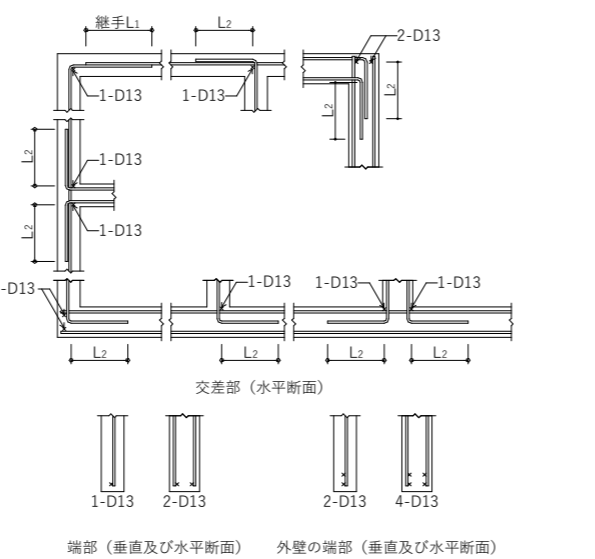
- b. 梁への定着



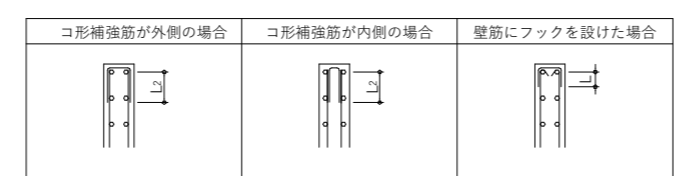
- c. スラブへの定着



- d. 壁交差部の配筋



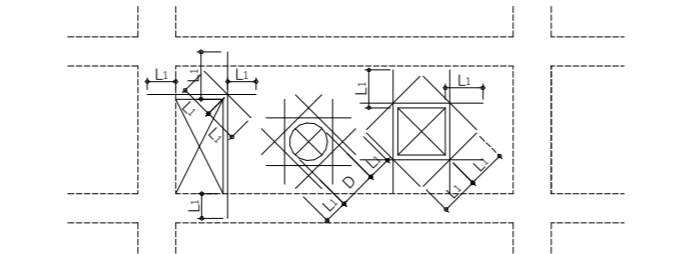
- e. 耐力壁の端部・開口部小口補強



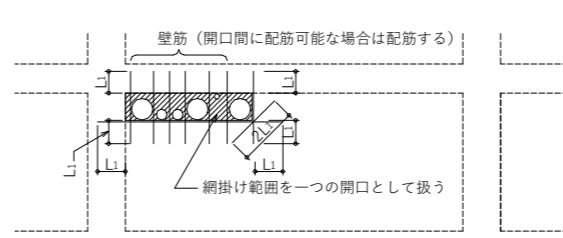
- (注) 1. 耐力壁の場合、コ形補強筋は壁筋と同径、同間隔とする。  
2. L寸法は構造図による。構造図に記載のない場合は15dとする。  
3. 壁筋にフックを設けた壁で、壁厚が250mm以下の場合、開口部小口補強は省略することができる。

3. 開口補強筋

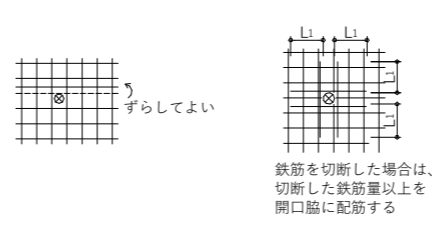
- a. 鉄筋による開口補強要領



b. 小開口が密集している場合の開口補強要領



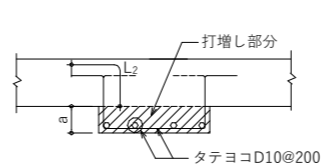
c. 単独円形小開口の場合の配筋要領



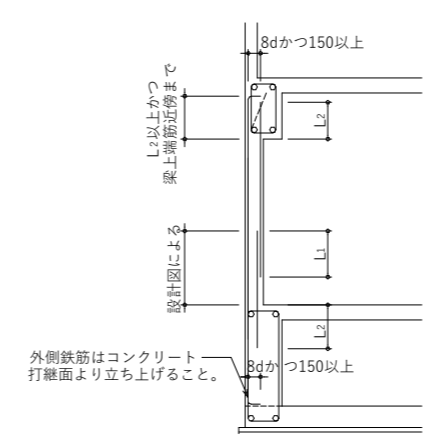
1. 壁開口の最大径が両方向の配筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることで開口部を避けて配筋できる場合は補強を省略することができる。  
2. 開口によって切断される鉄筋と同量以上の鉄筋で周囲を補強する(縦筋横筋とも)。  
3. 補強筋は鉄筋の間隔を50mm程度あけて配筋する。  
4. 斜め補強筋は縦筋横筋の内側に配筋する。  
5. 開口が梁に接している場合は、補強筋の定着長さは梁面からの長さとする。

4. 壁の打増し補強

- 壁の打増し厚さ(a)が50mm以上の場合の補強を示す。

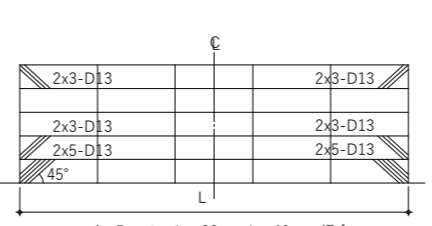


5. 地下外壁



6. 外壁ひび割れ防止筋

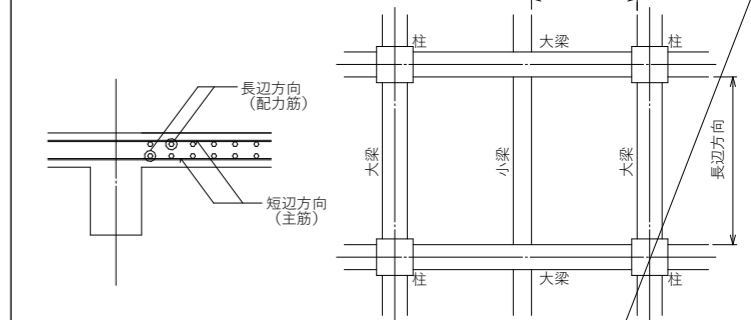
- 建築物端部スパンに設ける補強筋の例



採用に当たり壁厚180未満の場合は補強筋の納まりに注意すること

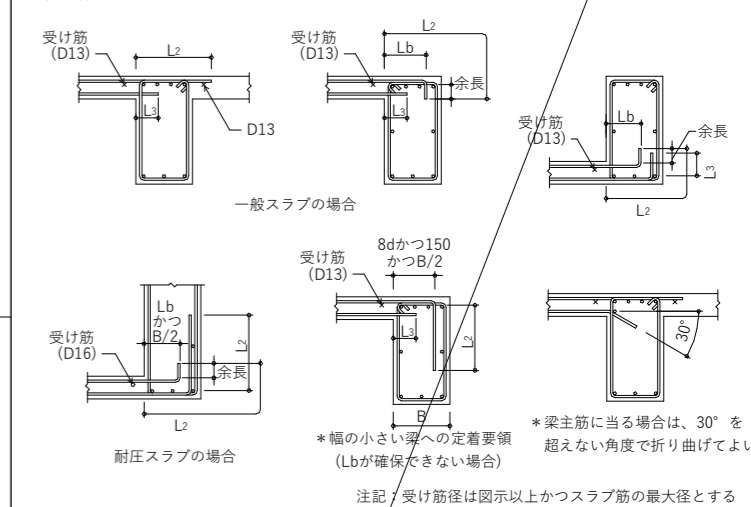
スラブの配筋

1. スラブの配筋

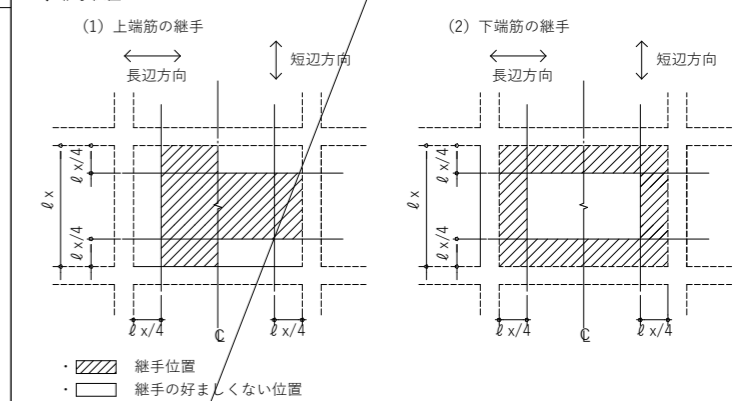


1. 配筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。  
2. 鉄筋の重ね継手長さは、L1とする。

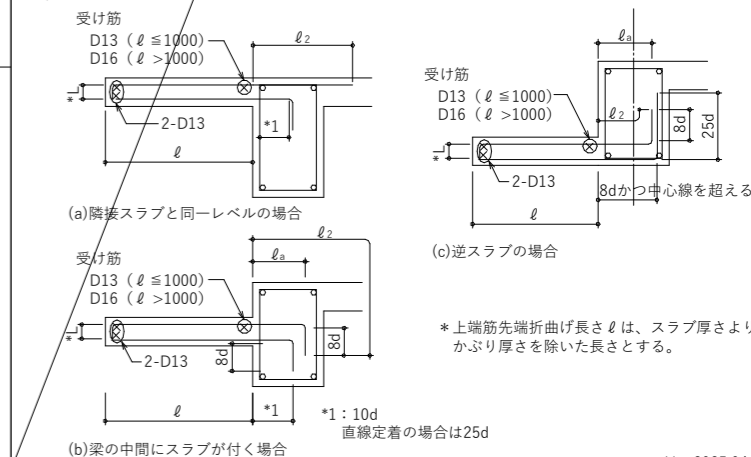
2. 定着



3. 継手位置



4. 片持ちスラブの配筋

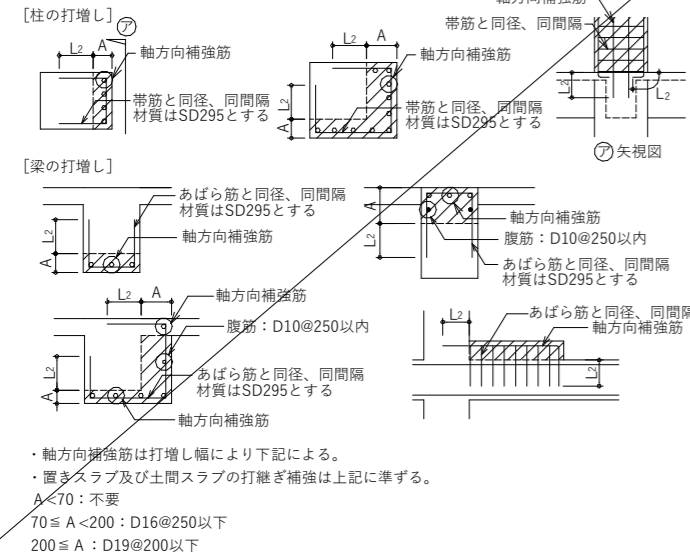


\* 上端筋先端折曲げ長さℓは、スラブ厚さよりかぶり厚さを除いた長さとする。

Ver.2025.04.01

柱梁の打増し補強配筋

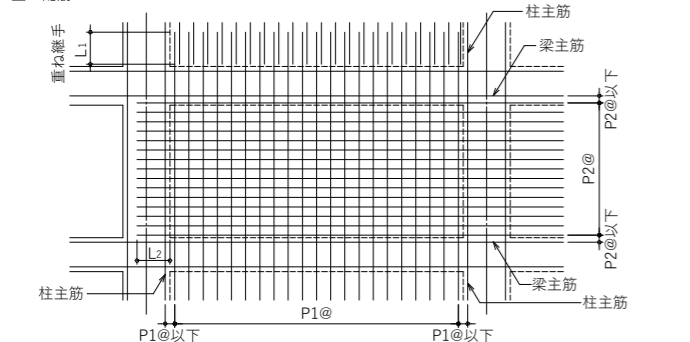
1. 打増し補強配筋



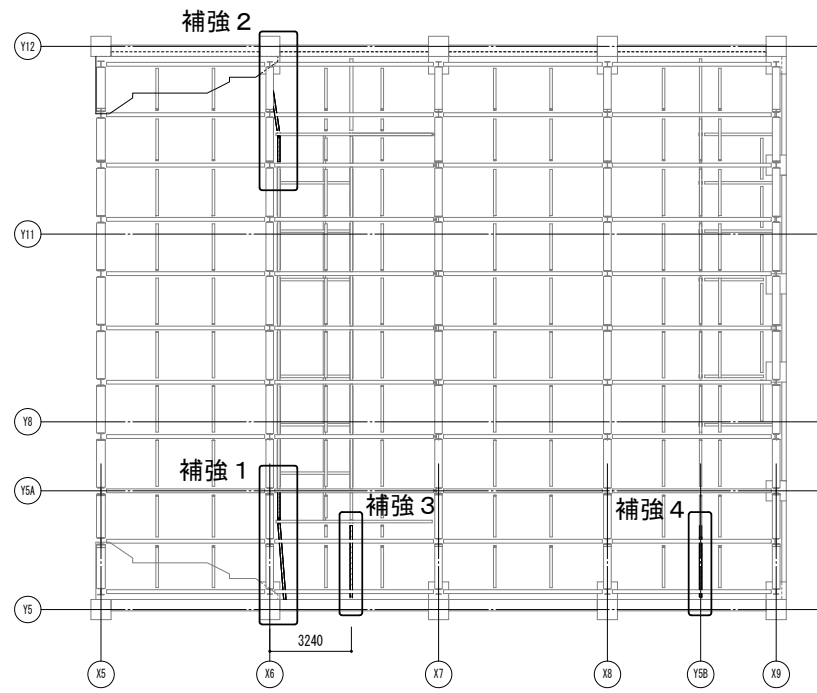
- ・軸方向補強筋は打増し幅により下記による。
- ・置きスラブ及び土間スラブの打増し補強は上記に準ずる。
- A < 70 : 不要
- 70 ≤ A < 200 : D16@250以下
- 200 ≤ A : D19@200以下

壁の配筋

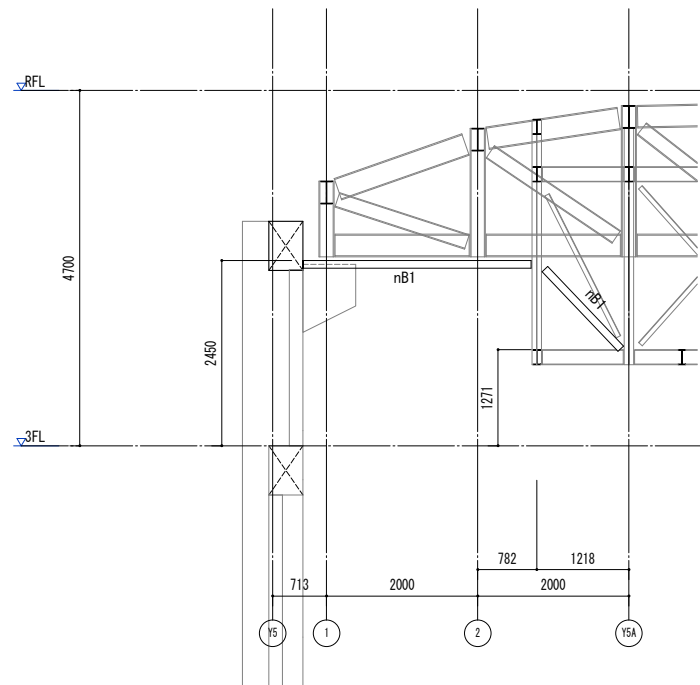
1. 壁の配筋



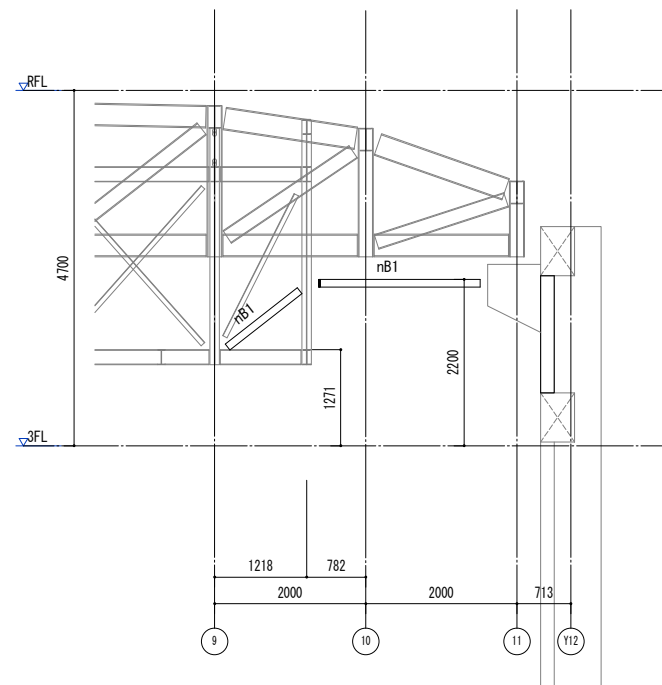
- ・壁筋の定着長さは、L2とする。
- ・壁筋の重ね継手長さは、L1とする。
- ・重ね継手はあき重ね継手としてもよい。
- ・P1@、P2@は壁リストに特記された壁筋間隔を示す。
- ・幅止め筋は縦筋横筋共に、D10@1000程度とする。



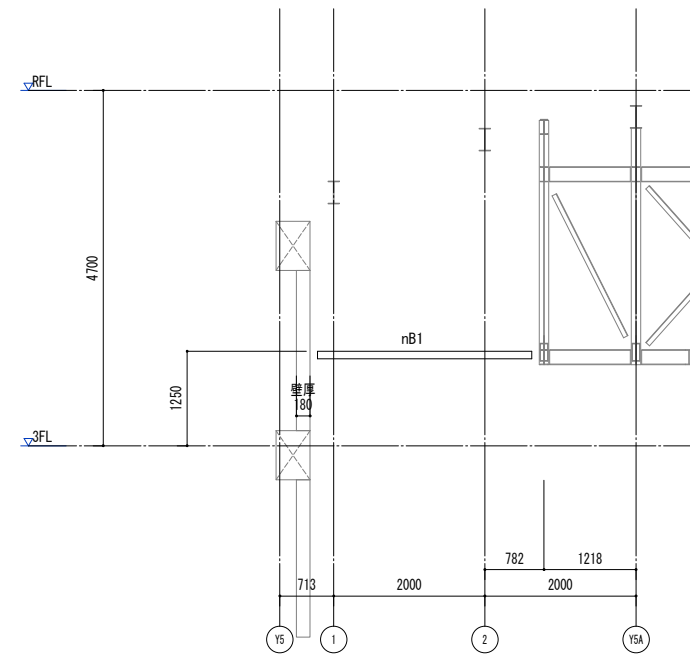
シーリングスポット補強鉄骨キープラン



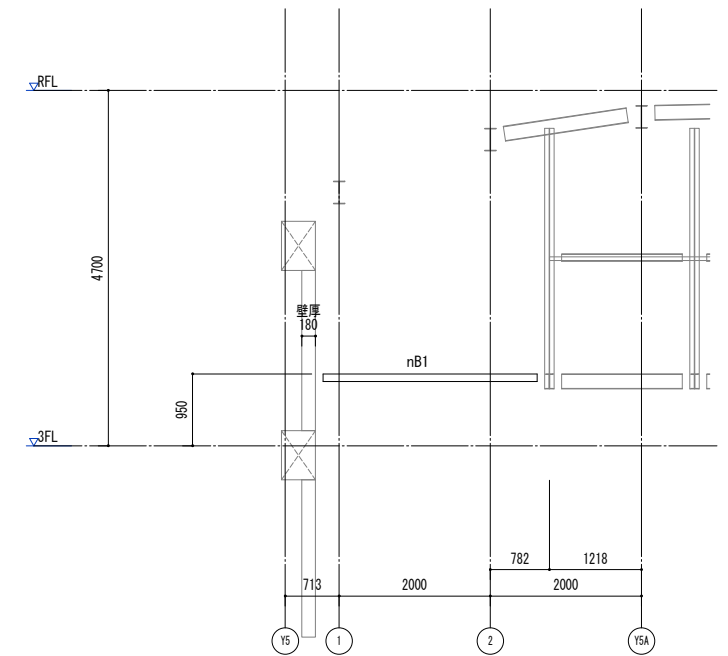
補強1 軸組図 (X6通り)



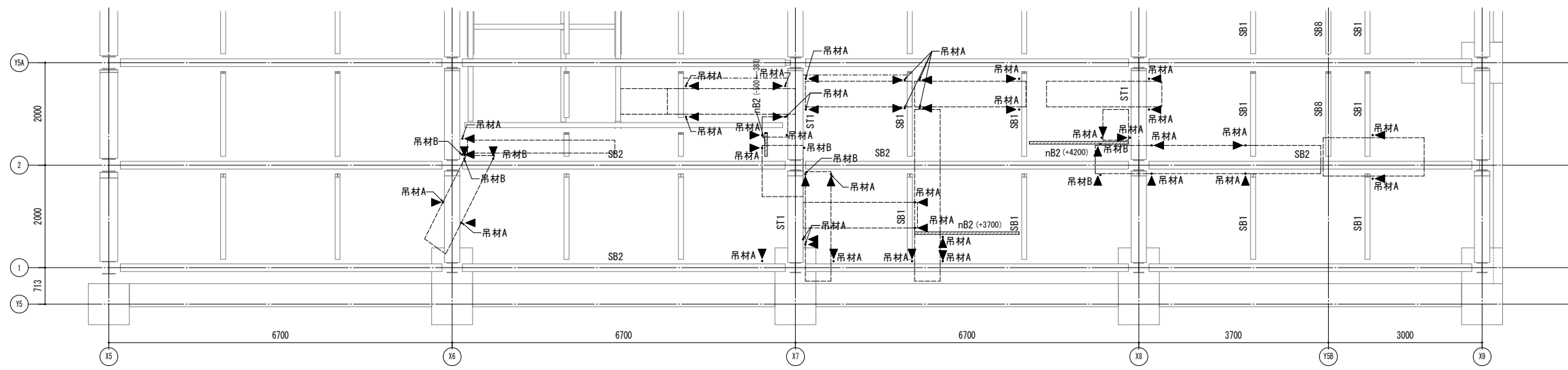
補強2 軸組図 (X6通り)



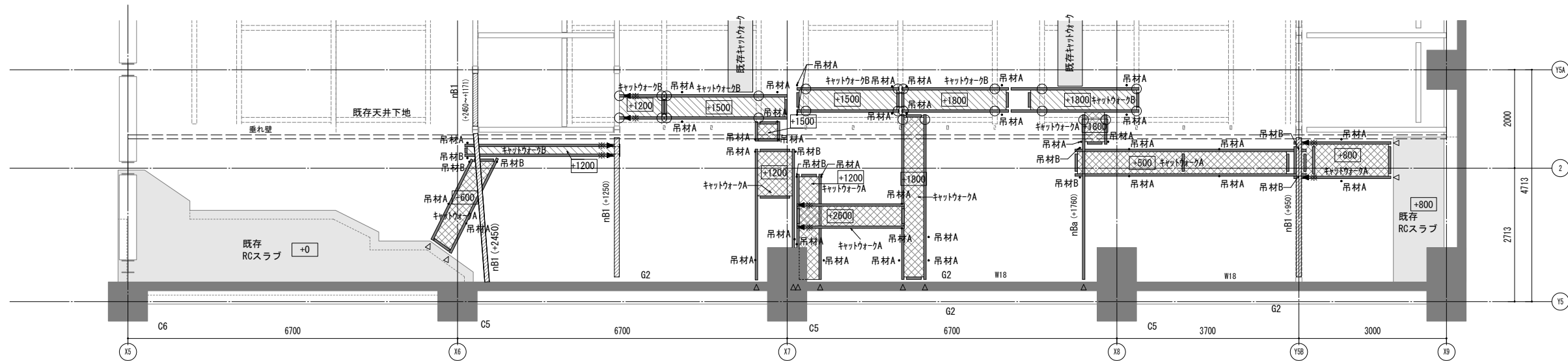
補強3 軸組図 (X6通り+3240)



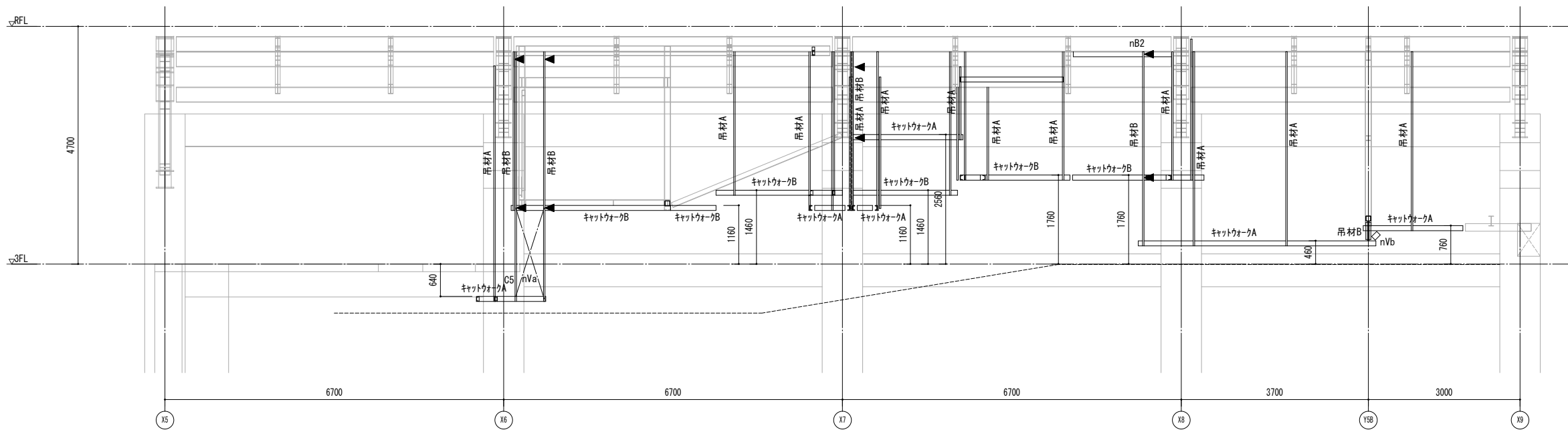
補強4 軸組図 (Y5B通り)



改修後 屋根伏図



改修後 キャットウォーク伏図 (3FL)



軸組図

- 特記なき限り下記とする
- ◀は、新設吊材の吊元接合を示す
  - nB○は、新設部材を示す
  - ( ) の数値は、3FLからの梁天端レベルを示す
  - キャットウォークAは、屋根鉄骨から吊り支持としているキャットウォークを示す
  - キャットウォークBは、既存鉄骨支持鉄骨に直接支持としているキャットウォークを示す
  - の数値は、3FLからの床面レベルを示す  
枠材の天端レベルは床面レベル-40とする
  - は、キャットウォークnBa材の既存鉄骨下地固定部を示す
  - ◁ は、キャットウォークnBa材のRC接合部を示す
  - ※は、キャットウォークnBa材の鉄骨直接接合部を示す
  - キャットウォーク踏面、手すり、段差については、意匠図による

部材リスト

部位	符号	部材	材質	接合部
キャットウォーク	nBa	C-100x50x20x2.3	SSC400	詳細図による
補強材	nB1	□-100x100x4.5	STKR400	G.PL-6 HTB 2-M16
新設小梁	nB2	C-100x50x20x3.2	SSC400	詳細図による
キャットウォークA・B	吊材A	1-M14	SS400	詳細図による
キャットウォークA・B	吊材B	C-100x50x20x2.3	SSC400	詳細図による
キャットウォークA	nVa	1-M14	SSC400	JISターナックル付 G.PL-6 HTB 1-M16
キャットウォークA	nVb	C-100x50x20x2.3	SSC400	詳細図による

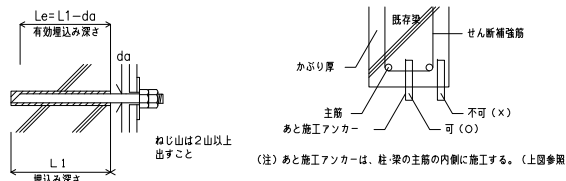
特記無き限り下記とする。  
 1. 鋼材は、SS400とする。  
 2. 高力ボルトは、S10Tとする。

あと施工アンカー特記仕様書

1. 特記なき事項について『公共建築工事標準仕様書（最新版）』または『公共建築改修工事標準仕様書（最新版）』による。
2. 使用材料
1) あと施工アンカー 接着系アンカー <カプセル型 有機系を標準とする>
2) アンカー筋 M16, M20 : SNR400B
3) 無収縮モルタル $F_m = 3.0 \text{ N/mm}^2$
3. 注意事項
1) 鉄骨接合部の加工に先立ち、躯体寸法及び配筋位置を実測し、これらの部材を実状に合った寸法に加工する。
2) あと施工アンカーの施工は、社団法人 日本建築あと施工アンカー協会第1種あと施工アンカー施工士の資格者とする。
3) あと施工アンカーは既設主筋の内側に設置すること。施工後のアンカー筋の抜き戻しによる調整をしない。
4) あと施工アンカーの施工は鉄筋検査機にて鉄筋位置を確認の上、行う事。
5) 柱と梁のあと施工アンカーは四隅部で重ならないように位置をずらすこと。
6) あと施工アンカー工事の為、低騒音・低振動の工法を採用し、監督職員の承認を得ること。
4. あと施工アンカーの施工後の確認試験は、次による。
・打音試験
1) 全数打音試験を行う。
・引張試験
1) 1ロットは、1日に1チームにより施工されたものの様毎とする。
2) 試験の箇所数は、1ロットに対し3本とし、ロットから無作為に抜き取る。
3) 試験方法は、確認強度（設計強度の2/3）まであと施工アンカーを引張るものとする。
判定基準は、確認強度を有する場合を合格とする。
4) ロットの合格判定は、ロットの全ての試験箇所が合格と判定された場合に、当該ロットを合格とする。
5) 不合格ロットが発生した場合の処理は、次による。
① 直ちに作業を中止し、欠陥発生の原因を調査して必要な改善措置を定め、監督職員の承認を受ける。
② 不合格ロットは、残り全数に対して試験を行う。試験方法及び判定基準は上記（3）による。
③ 試験の結果、不合格となったあと施工アンカーは、監督職員と協議を行い再施工する。

あと施工アンカー要領図

接着系アンカー仕様

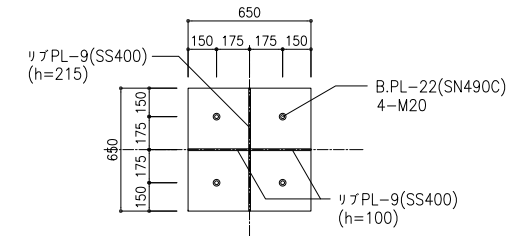
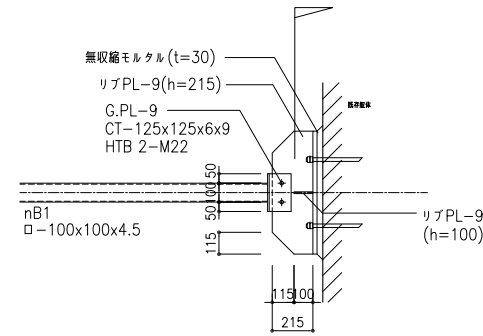


場所	$L_e$	$L_1$	備考
M20埋合部	10 $d_a$	11 $d_a$	
M16埋合部	7 $d_a$	8 $d_a$	t180履行ち込み部

本図に使用される記号  
 $d_a$  鉄筋の呼び名に用いた数値  
 $L_e$  有効埋込み長さ  
 $L_1$  埋込み長さ (埋孔長)

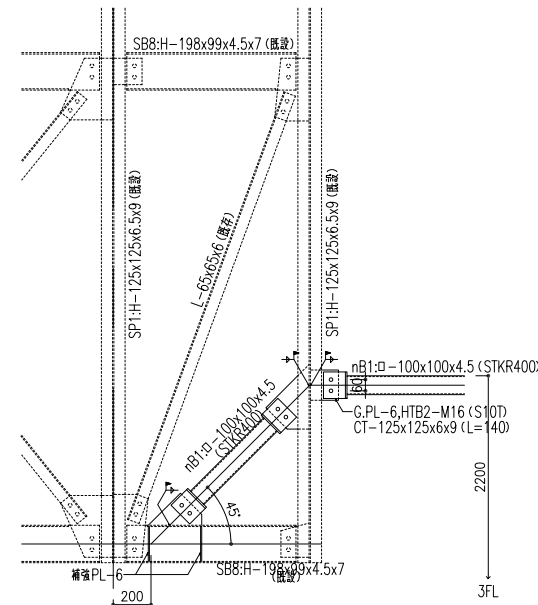
補強材(nB1)本体取り付け部施工要領

nB1(□-100x100x4.5(G.PL-9, CT-125x125x6x9, HTB 2-M22))  
 本体取り付け部  
 既設の鉄筋と干渉する場合は下図のアンカー位置を±100mmの範囲以内で移動可能とする。

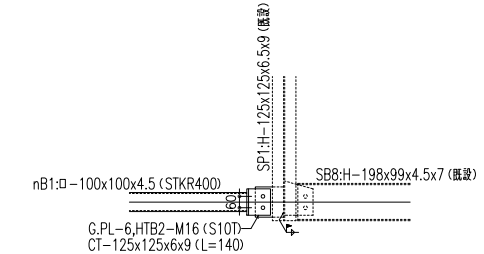


矢視図

nB1取付要領 補強2軸組図 (X6通)

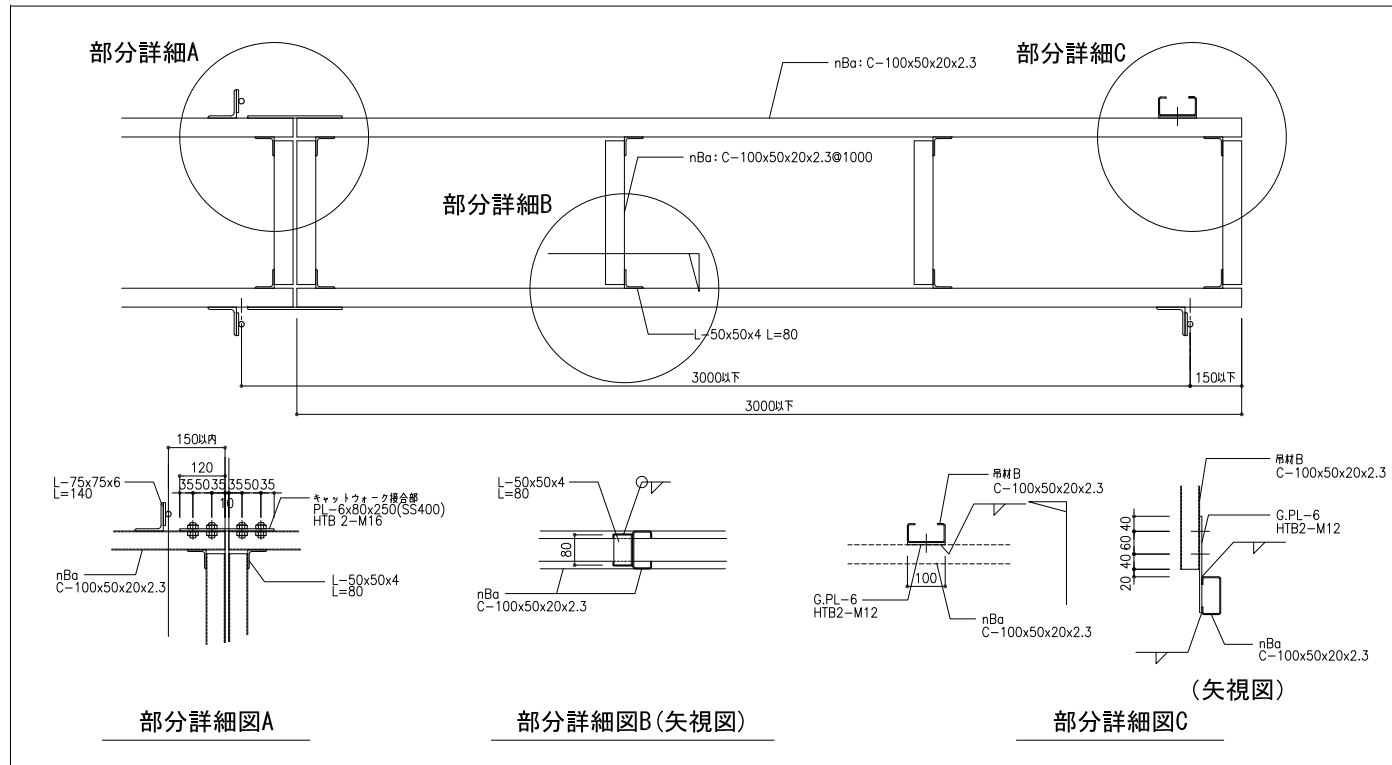


nB1取付要領 補強3軸組図 (X6通+3240)



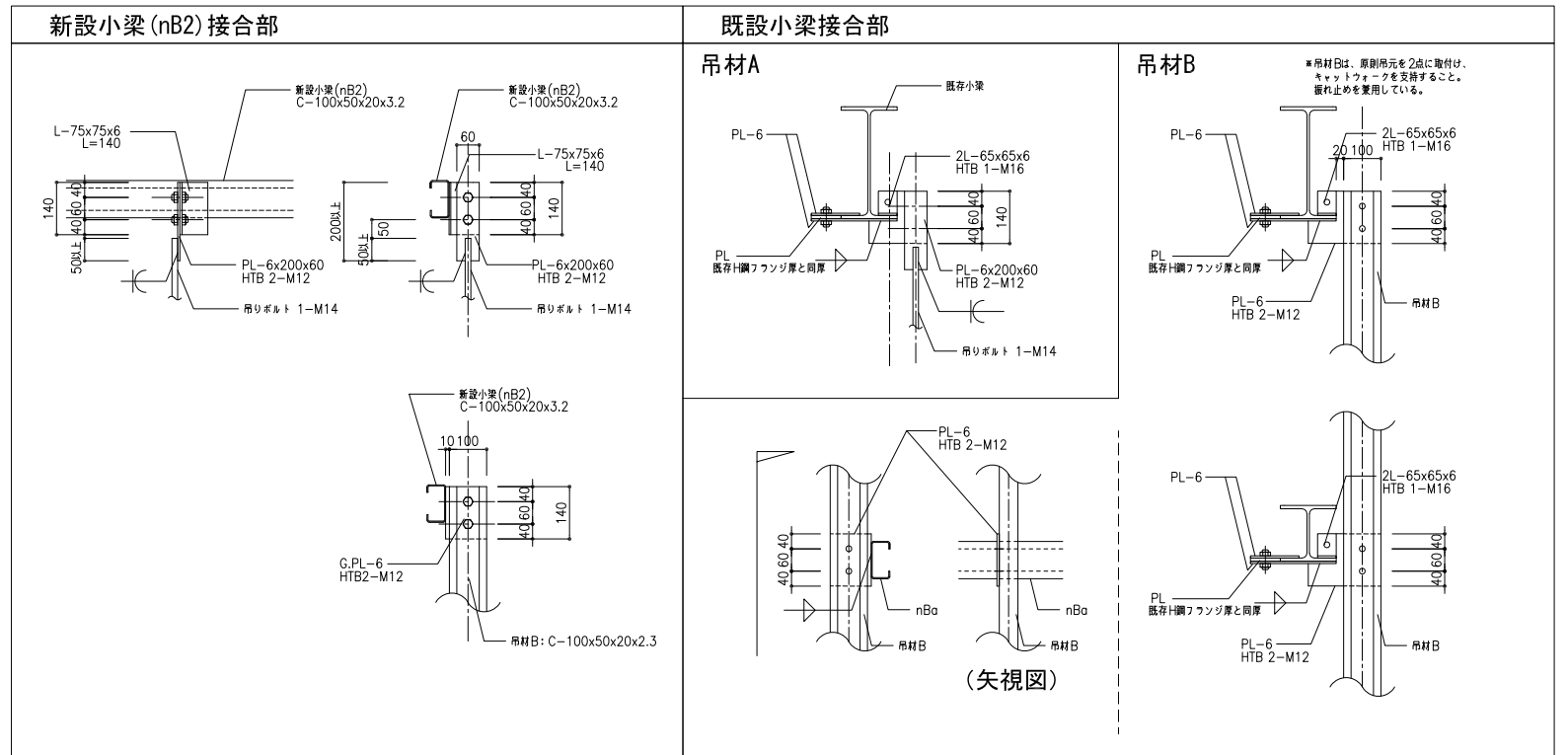
キャットウォーク詳細図

特記無き限り下記とする。  
 1. 鋼材は、SS400とする。  
 2. 高力ボルトは、S10Tとする。



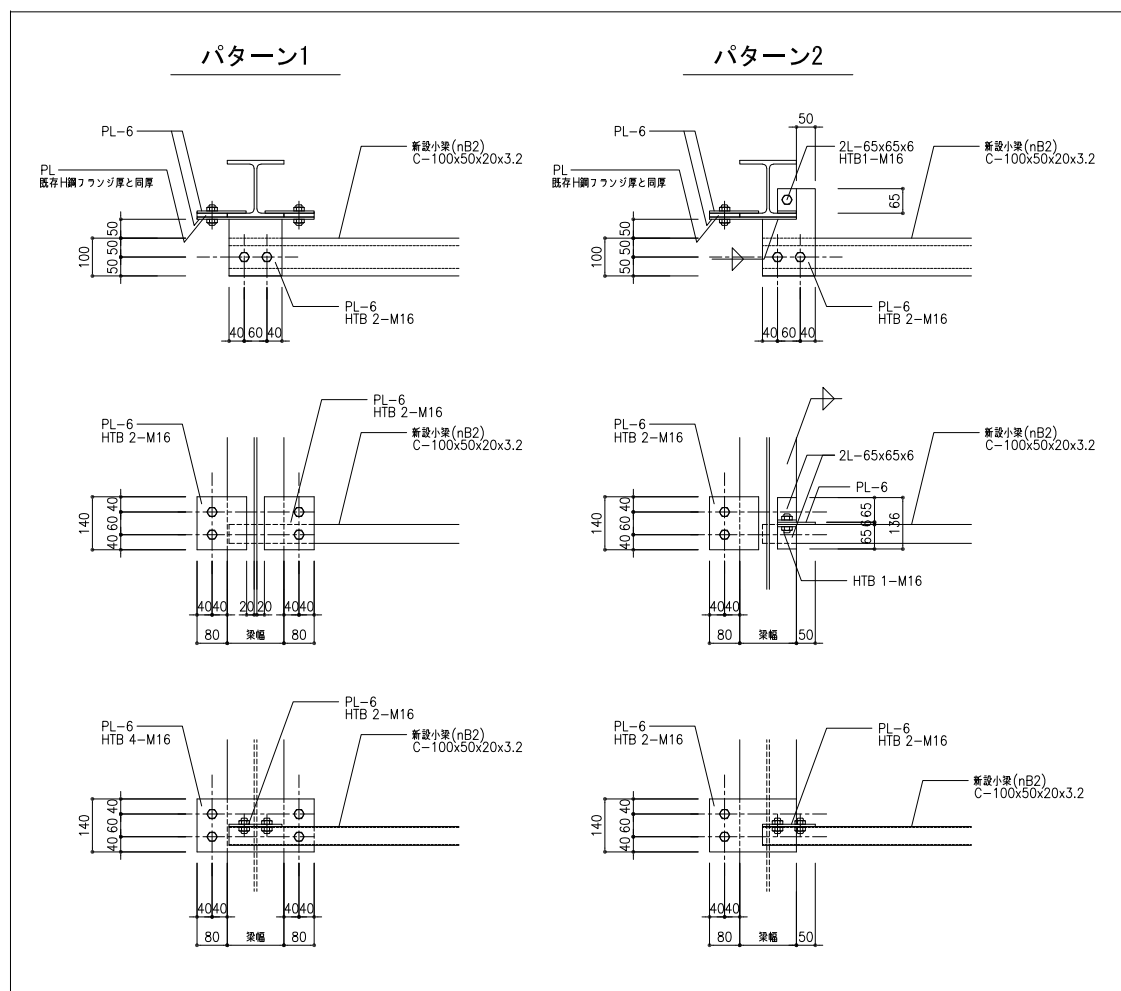
吊りボルト接合部 詳細図

特記無き限り下記とする。  
 1. 鋼材は、SS400とする。  
 2. 高力ボルトは、S10Tとする。

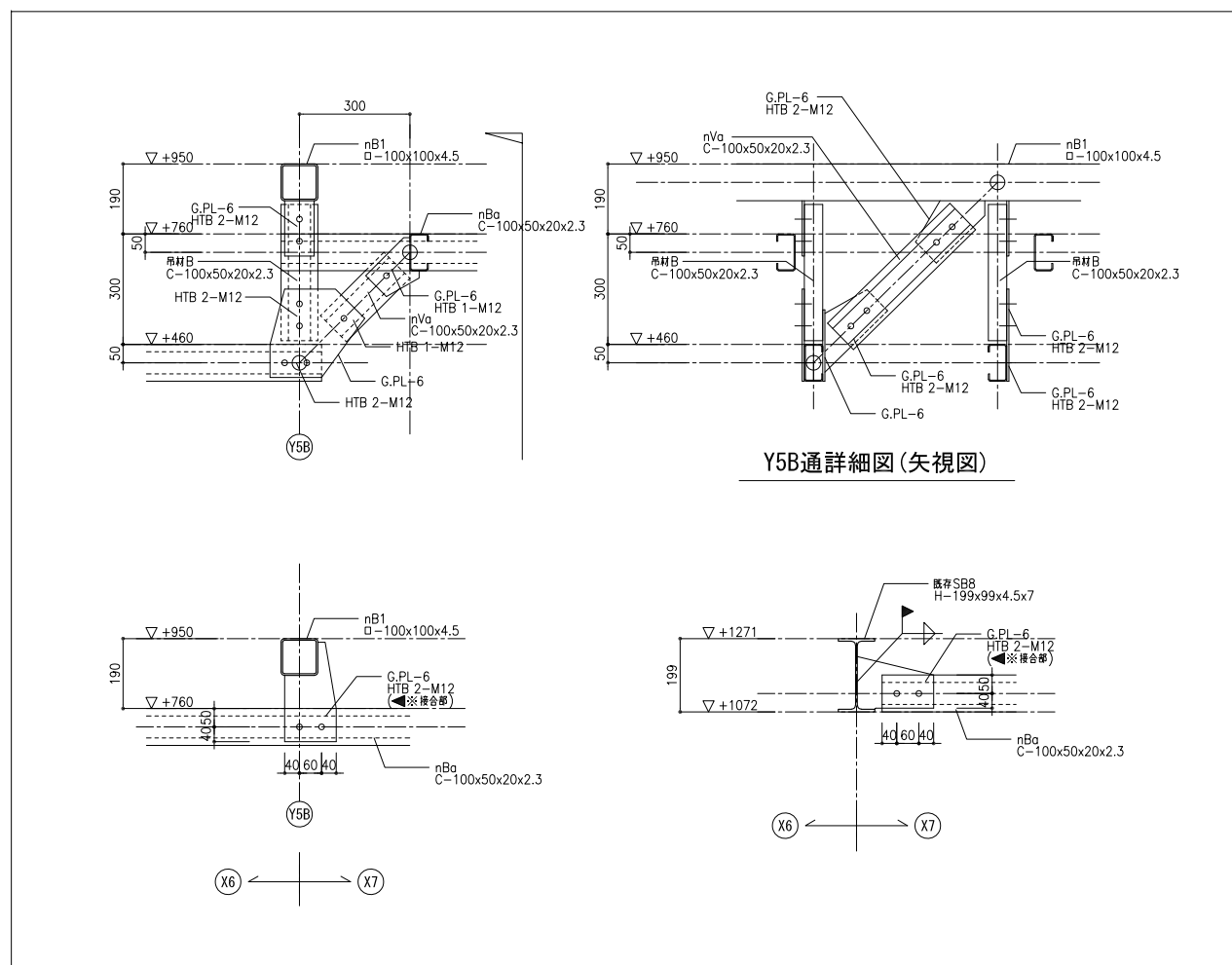


新設小梁(nB2)接合部 詳細図

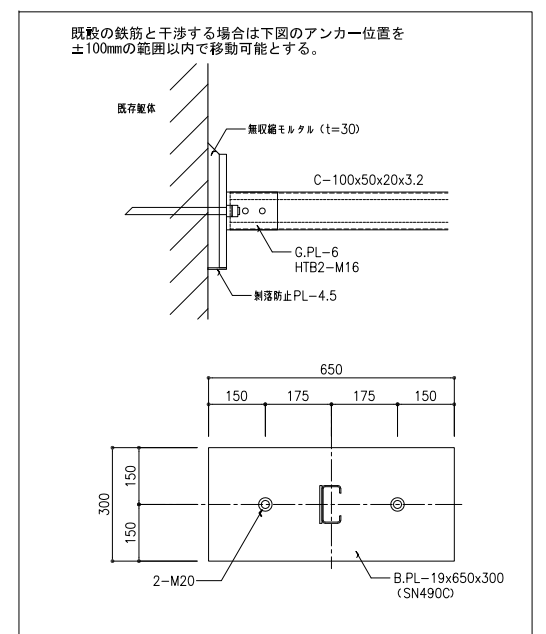
特記無き限り下記とする。  
 1. 鋼材は、SS400とする。  
 2. 高力ボルトは、S10Tとする。



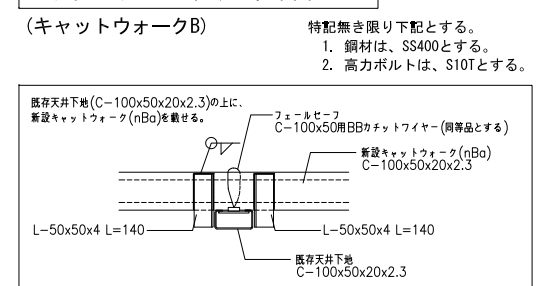
鉄骨直接接合部 詳細図

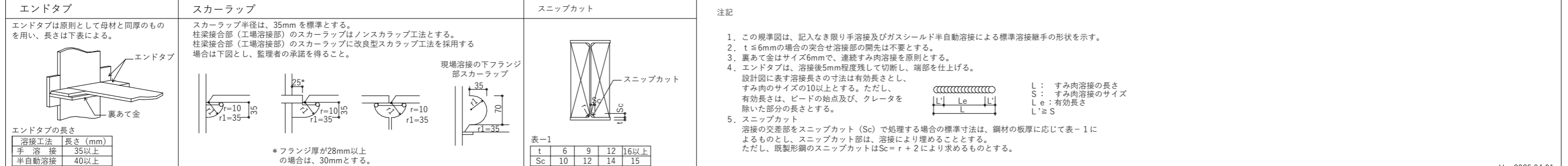
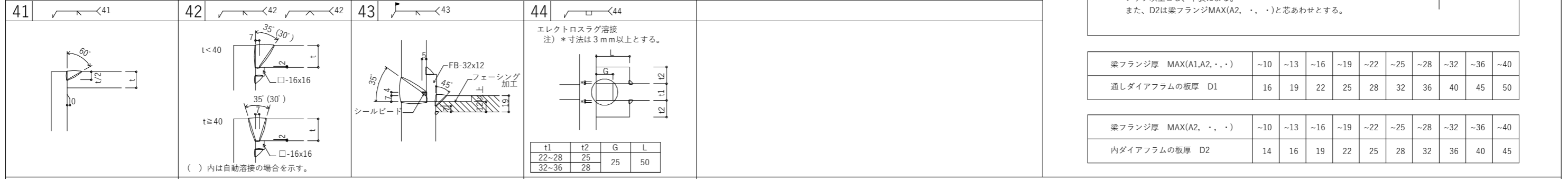
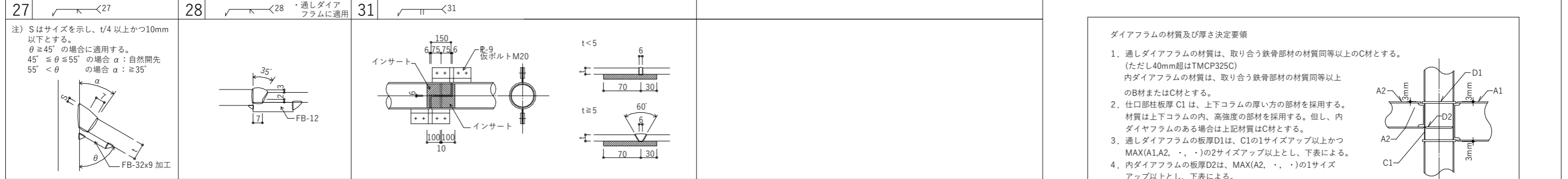
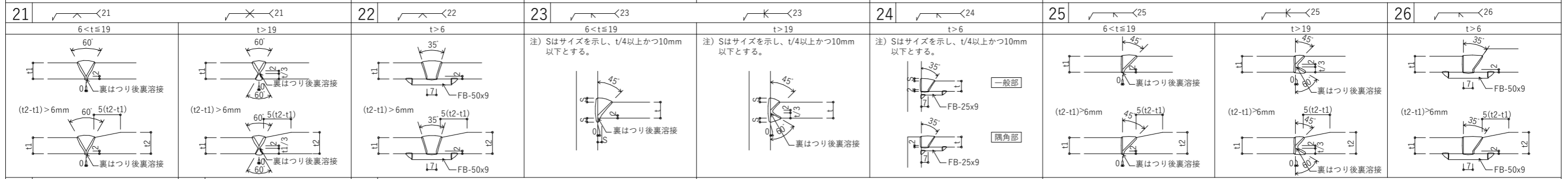
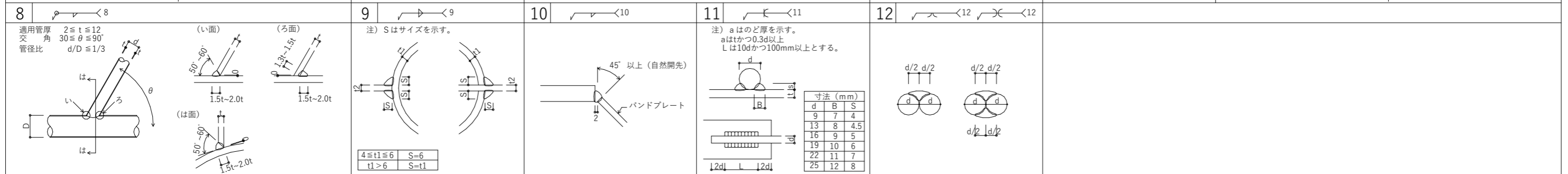
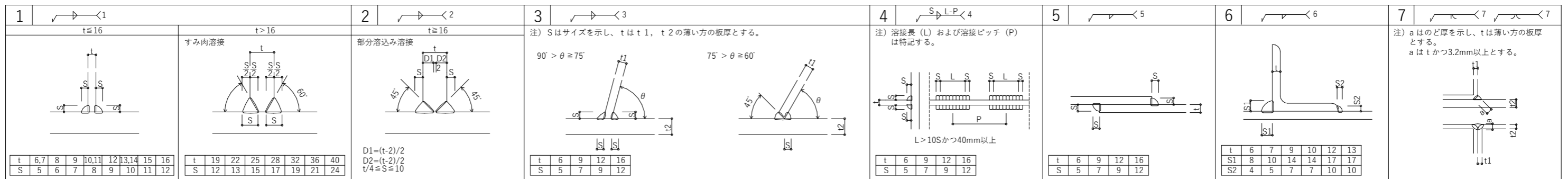


RC接合部 詳細図



既存天井地下固定部 詳細図





ダイアフラムの材質及び厚さ決定要領

- 通しダイアフラムの材質は、取り合う鉄骨部材の材質同以上のC材とする。(ただし40mm超はTMCP325C) 内ダイアフラムの材質は、取り合う鉄骨部材の材質同以上のB材またはC材とする。
- 仕口部柱板厚 C1 は、上下コラムの厚い方の部材を採用する。材質は上下コラムの内、高強度の部材を採用する。但し、内ダイアフラムのある場合は上記材質はC材とする。
- 通しダイアフラムの板厚D1は、C1の1サイズアップ以上かつMAX(A1,A2, . . .)の2サイズアップ以上とし、下表による。
- 内ダイアフラムの板厚D2は、MAX(A2, . . .)の1サイズアップ以上とし、下表による。また、D2は梁フランジMAX(A2, . . .)と芯あわせとする。

梁フランジ厚 MAX(A1,A2, . . .)	~10	~13	~16	~19	~22	~25	~28	~32	~36	~40
通しダイアフラムの板厚 D1	16	19	22	25	28	32	36	40	45	50

梁フランジ厚 MAX(A2, . . .)	~10	~13	~16	~19	~22	~25	~28	~32	~36	~40
内ダイアフラムの板厚 D2	14	16	19	22	25	28	32	36	40	45

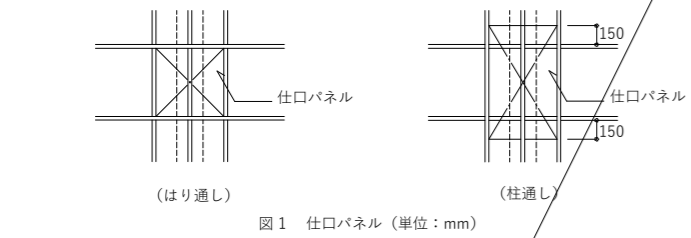
注記

- この規準図は、記入なき限り手溶接及びガスシールド半自動溶接による標準溶接継手の形状を示す。
- t ≧ 6mmの場合の突合せ溶接部の開先は不要とする。
- 裏あて金はサイズ6mmで、連続すみ肉溶接を原則とする。
- エンドタブは、溶接後5mm程度残して切断し、端部を仕上げる。設計図に表す溶接長さの寸法は有効長さとし、すみ肉のサイズの10以上とする。ただし、有効長さは、ビードの始点及び、クレータを除いた部分の長さとする。
- スニップカット 溶接の交差部をスニップカット (Sc) で処理する場合の標準寸法は、鋼材の板厚に応じて表-1によるものとし、スニップカット部は、溶接により埋めることとする。ただし、既製鋼材のスニップカットはSc = r + 2により求めるものとする。

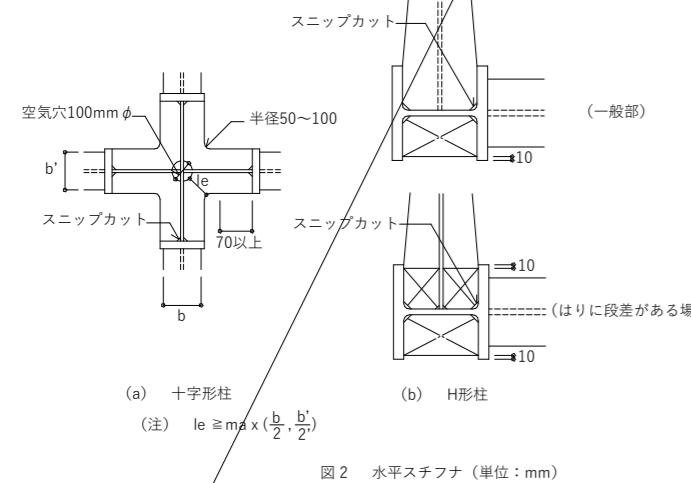
L : すみ肉溶接の長さ  
S : すみ肉溶接のサイズ  
Le : 有効長さ  
L' ≧ S

# 1. 仕口部詳細

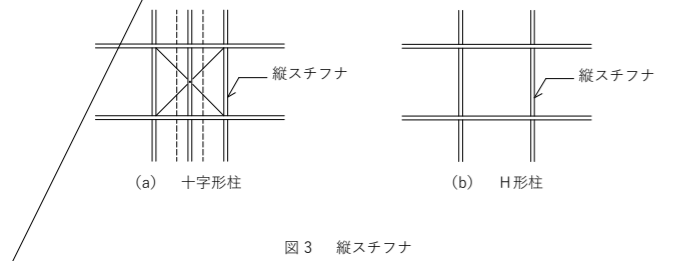
(1) 仕口パネル  
仕口パネルの範囲は、図1を標準とし、材質は、取付くはり及び柱のウエブ材のうち、強度及び溶接性の最も優れたものと同一のものを採用し、板厚は、いずれか厚いものの1サイズUP以上かつ9mm以上とする。



(2) 水平スチフナ  
十字形柱及びH形柱の仕口部に設置する水平スチフナの形状及び大きさは、図2を標準とし、材質は、はりフランジ材と同一のものを採用し、板厚は、はりフランジ厚以上かつ9mm以上とする。なお、はり幅が300mm以上の場合は、スニップカットの代わりにスカラップとすることができる。

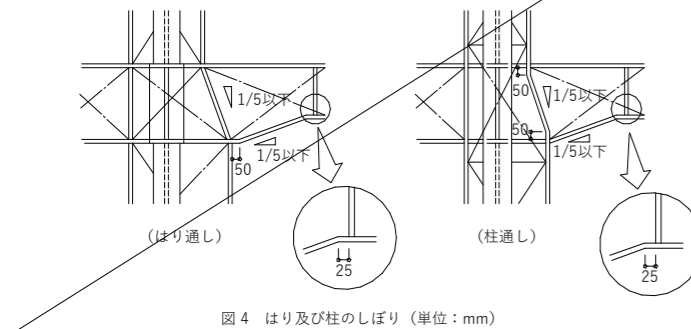


(3) 縦スチフナ  
十字形柱及びH形柱の仕口部に設置する縦スチフナは、図3を標準とし、縦スチフナの幅は、取付くはりフランジと同一とし、材質は、上下柱フランジのうち、強度及び溶接性の最も優れたものと同一のものを採用し、板厚は、いずれか最厚のもの以上とする。

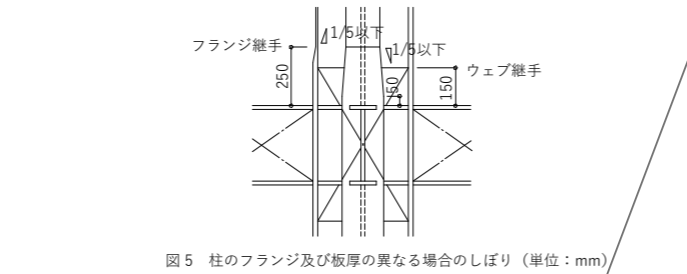


# 2. 各部詳細

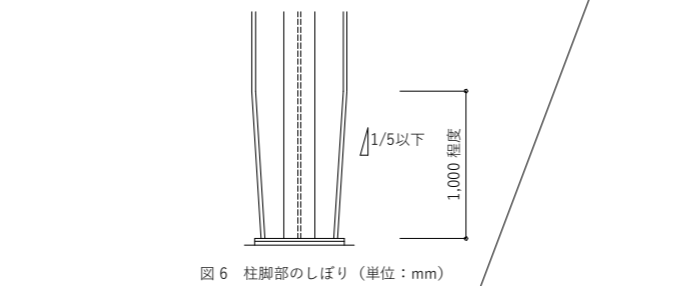
(1) はり及び柱のしぼり  
a. はり通し及び柱通しのしぼりの限度及び位置の標準は、図4による。



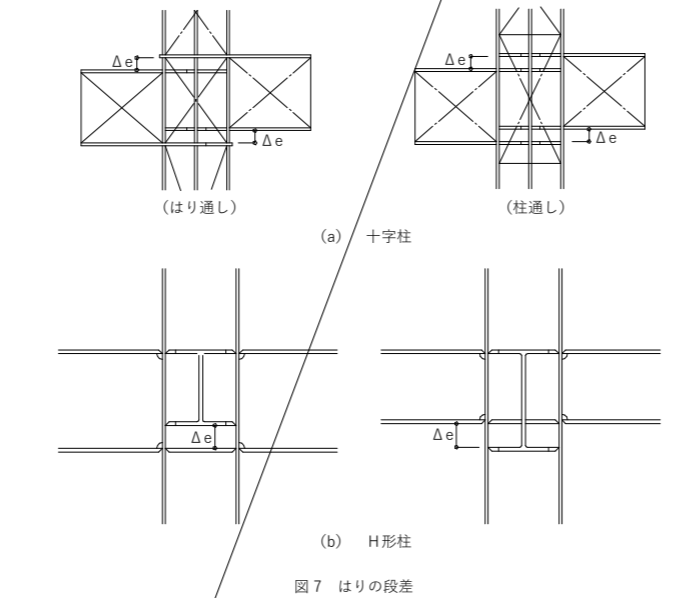
b. 柱のフランジ幅、フランジ板厚及びウェブ板厚の異なる場合のしぼりの限度及び位置の標準は、図5による。



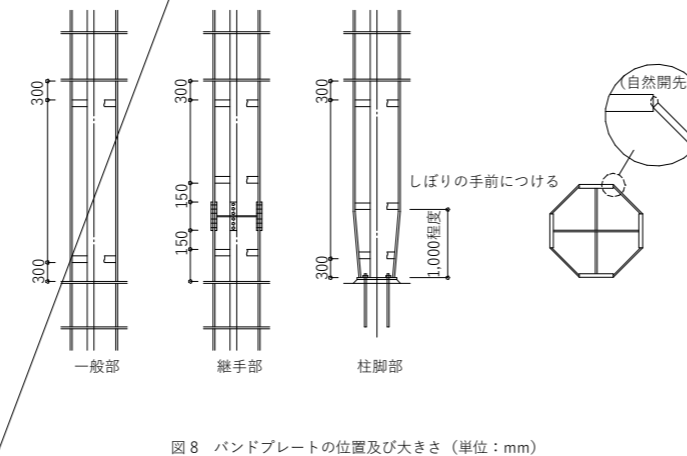
c. 柱脚部のしぼりの限度及び位置の標準は、図6による。



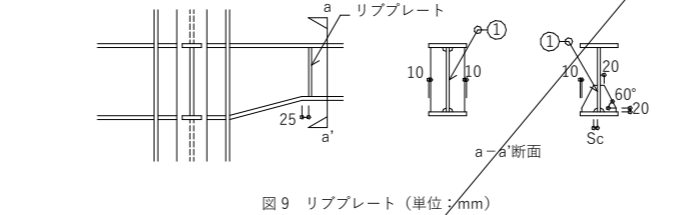
(2) はりの段差  
柱に取付くはりに段差を設ける場合の寸法(Δe)は、溶接性を考慮して、十字形柱及びH形柱で150mm以上を確保する。



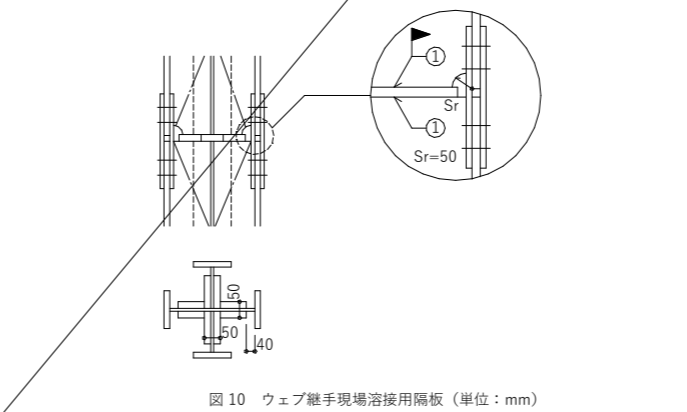
(3) バンドプレート  
注) バンドプレートはFb-50x6(SS400)とする。



(4) リブプレート  
はりにハンチを設ける場合は、図9に示すようなリブプレートを付けるものとし、板厚はウエブと同等とする。ただし、リブプレートの大きさはスリーブ等の納りを考慮して小さくすることができる。

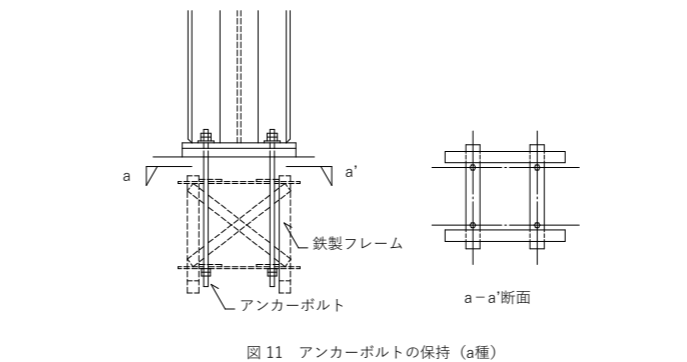


(5) ウェブ継手現場溶接用隔板  
現場で柱ウエブ材を溶接する場合の隔板の標準は、図10により、材質は、上下柱ウエブ材のうち、強度及び溶接性の最も優れたものを採用し、板厚は、9mm以上とする。

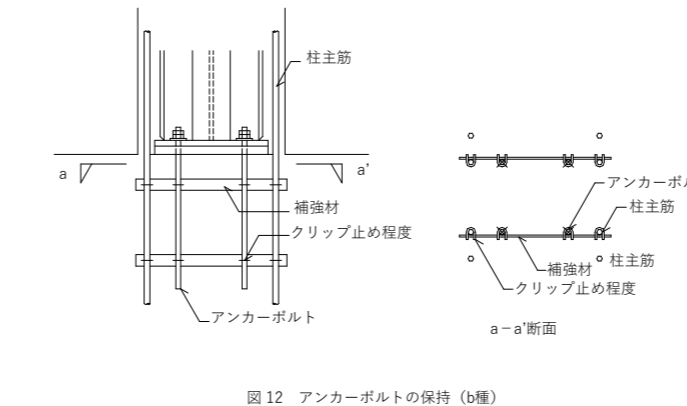


# 3. アンカーボルト取付要領

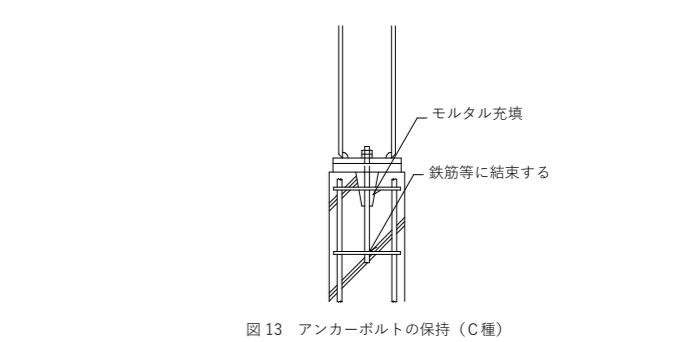
3. アンカーボルト取付要領  
(1) アンカーボルトの保持及び埋込み工法  
a. a種: 鋼製フレームを用いてアンカーボルトを保持する方法。



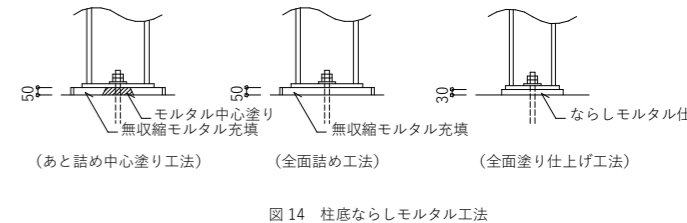
b. b種: 周囲の鉄筋に補強材等を用いてアンカーボルトを保持する方法。



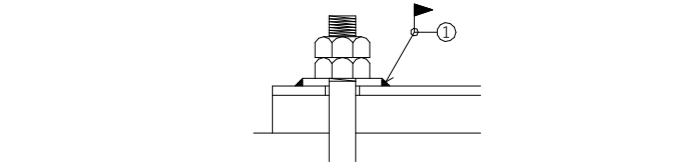
c. C種: 頭部を漏斗状にあげた可動埋込み式の方法。



(2) 柱底ならしモルタルの工法  
a. a種: あと詰め中心塗り又は全面あと詰め工法として、無収縮モルタル材を充填する工法。  
b. b種: 全面塗り仕上げをならしモルタル等で仕上げる工法。



(3) 座金の溶接  
アンカーボルトはコンクリートに埋込まれる場合を除きダブルナット締めとする。また、アンカーボルトにせん断力を負担させる場合は、座金厚を検討したうえで座金はベースプレートに全周溶接する。



# 4. 高力ボルトの縁端距離及びピッチ

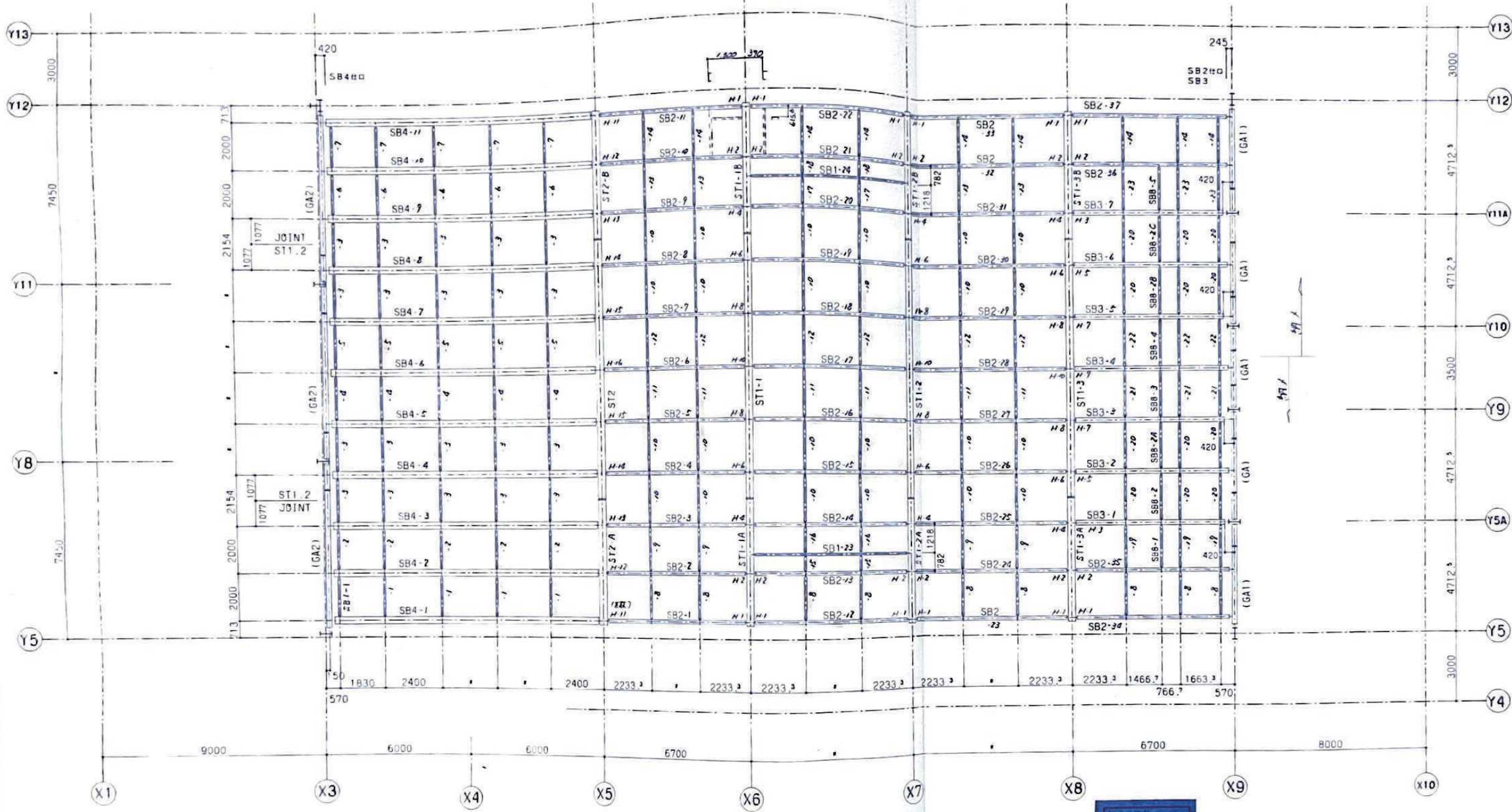
(1) 縁端距離及びピッチ  
縁端距離及びピッチは表1を標準とする。ただし、引張材の接合部分において、せん断を受けるボルトが応力方向に3本以上並ばない場合、応力方向の縁端距離は、ボルト軸径の2.5倍以上とする。

ねじの呼び	縁端距離 e(mm)	呼び p(mm)	高力ボルト穴径
M16	40	60	18.0
M20			22.0
M22			24.0
M24	45	70	26.0

(2) 千鳥打ちのゲージ及び間隔  
千鳥打ちのゲージ及び間隔は、表2を標準とする。

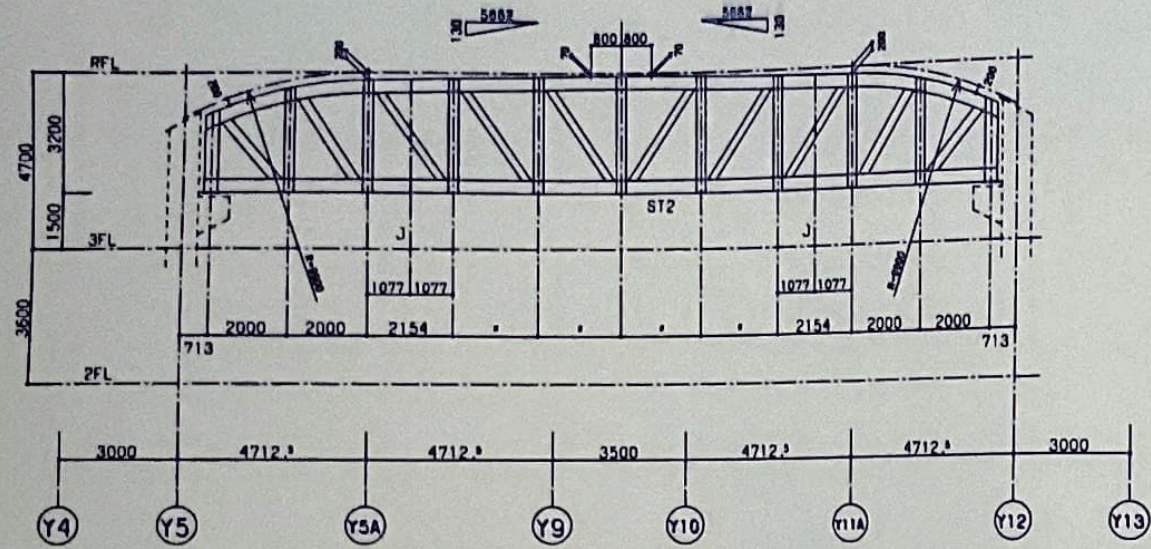
ゲージ (g)	間隔 (b)			
	ねじの呼び			
	M16	M20	M22	M24
35	50	65		
40	45	60		
45	40	55		
50	35	50		
55	25	45		
60	-	40		

図16 千鳥打ちのゲージ及び間隔

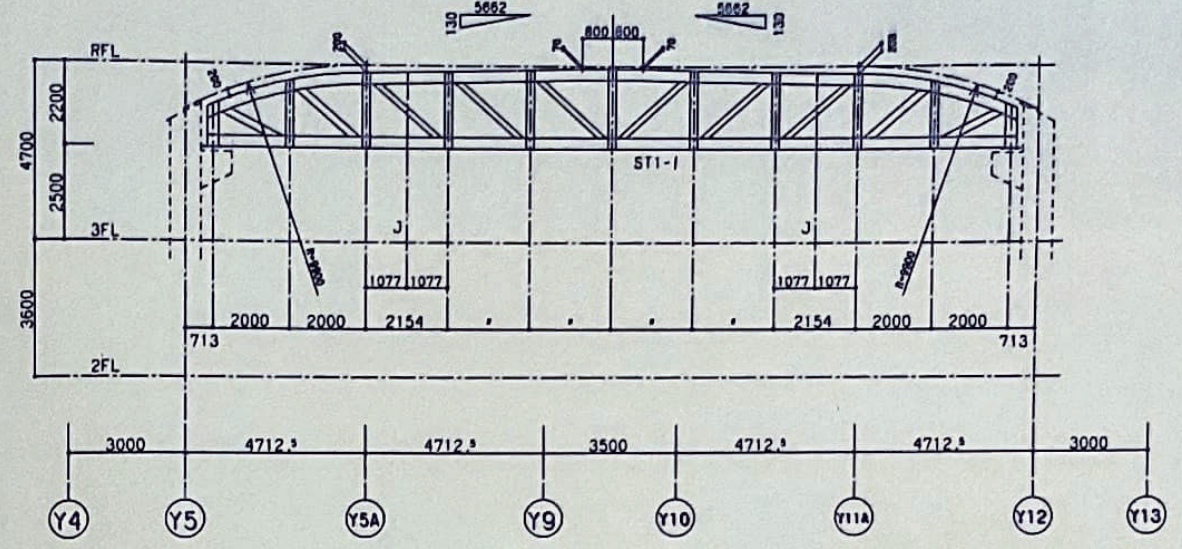


**本体屋根伏図**  
 特記外断材はSB1とする  
 断材はE-50×75×45×73 1/2 並列 (Soc.MI-1A)

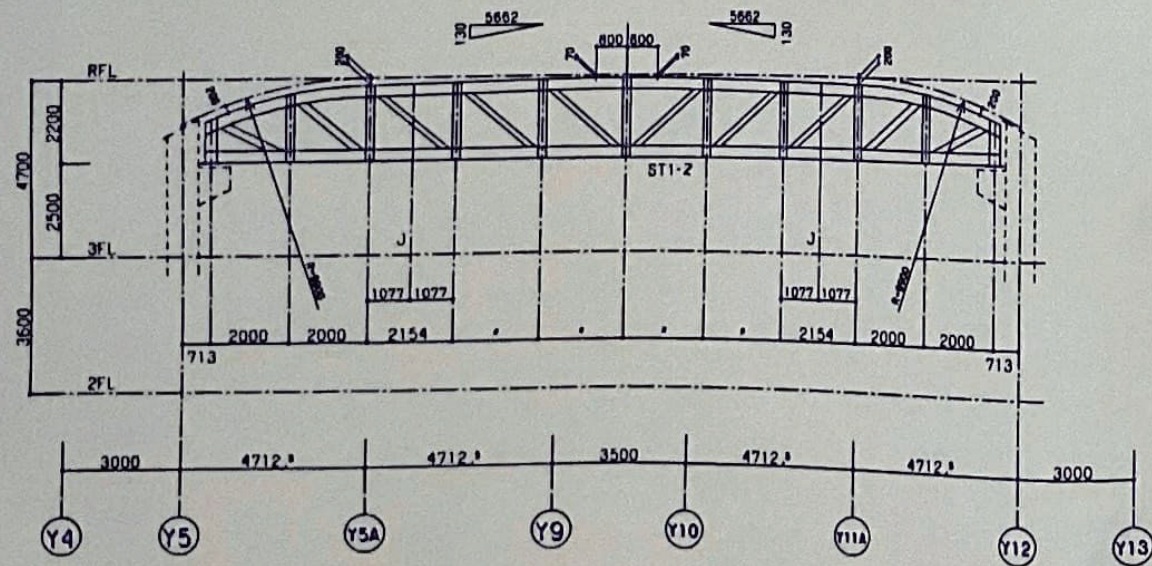
本体屋根リスト								
設計マーク	主材サイズ		継手マーク	備考	設計マーク	主材サイズ		
ST1	上弦	H-300X300X10X15	GJ16	上弦 スチールボルト 13φ-φ200 ダブル.n=100	SB1, SBB	全断	H-198X99X4.5X7	
	下弦	H-300X300X10X15			SB2	全断	H-300X150X6.5X9	
	断材	端部			H-300X300X10X15	SB3	全断	H-294X200X8X12
		中央			H-200X200X8X12	SB4	全断	H-582X300X12X17
	断材	端部			H-200X200X8X12	SBB	全断	H-198X99X4.5X7
		中央			H-150X150X7X10	GA, GA1	全断	HY-350X200X6X12
			GA2	全断	BH-600X200X9X12			
ST2	上弦	H-350X350X12X19	GJ17	上弦 スチールボルト 13φ-φ200 ダブル.n=100				
	下弦	H-350X350X12X19						
	断材	端部			H-350X350X12X19			
		中央			H-250X250X9X14			
	断材	端部			H-250X250X9X14			
		中央			H-200X200X8X12			



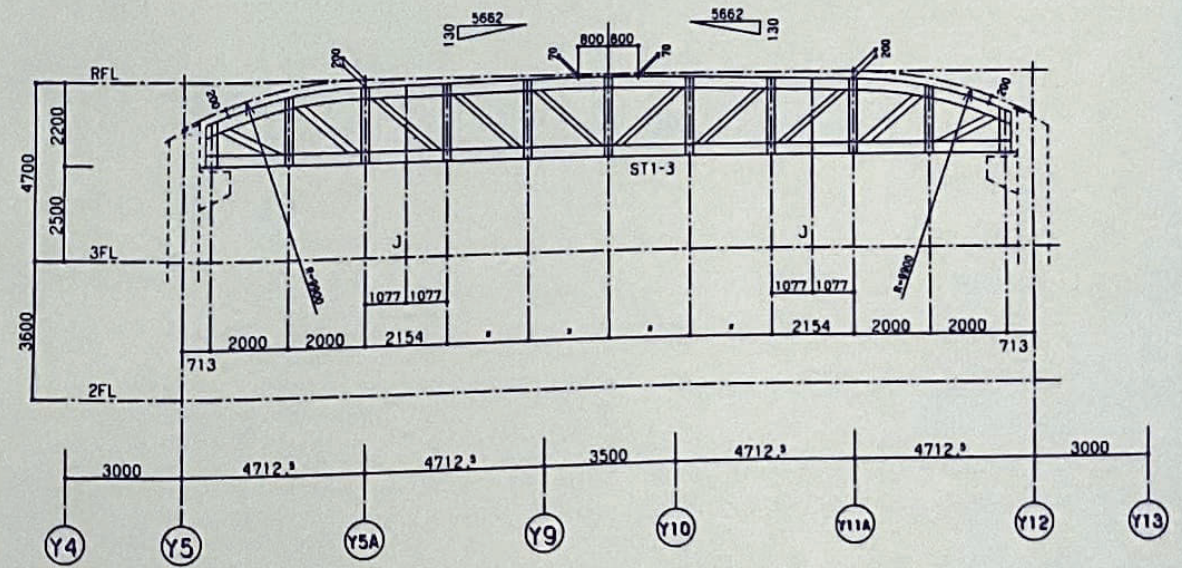
X5 通り軸組図



X6 通り軸組図

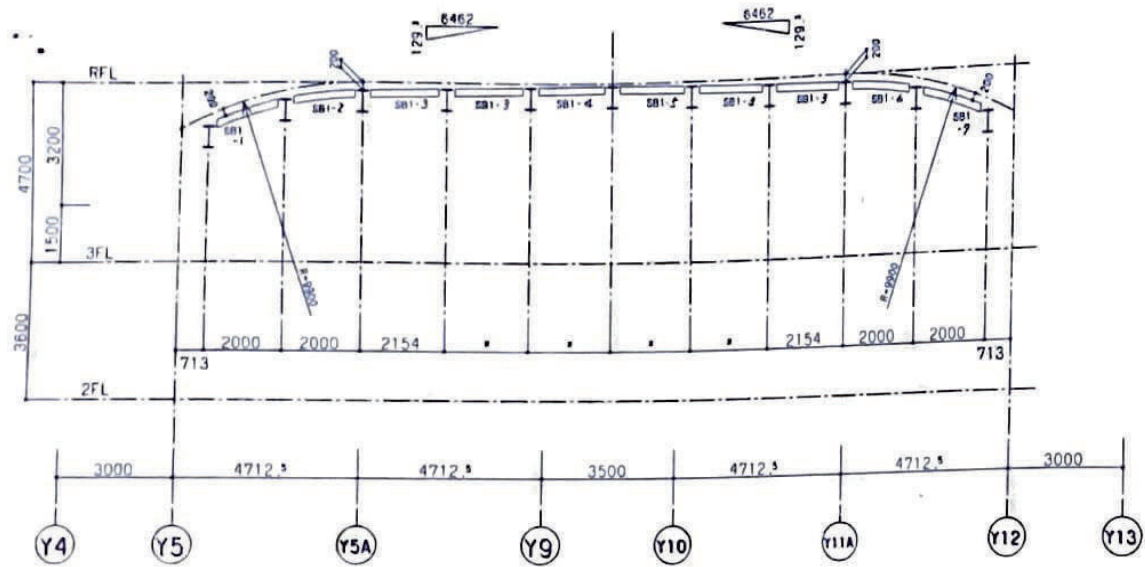


X7 通り軸組図

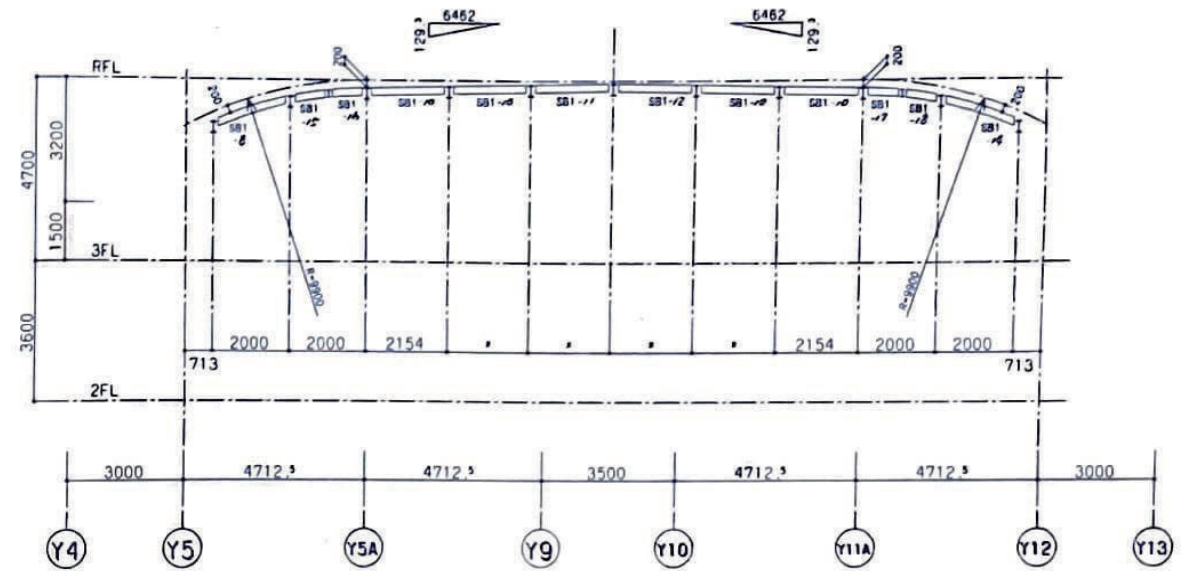


X8 通り軸組図

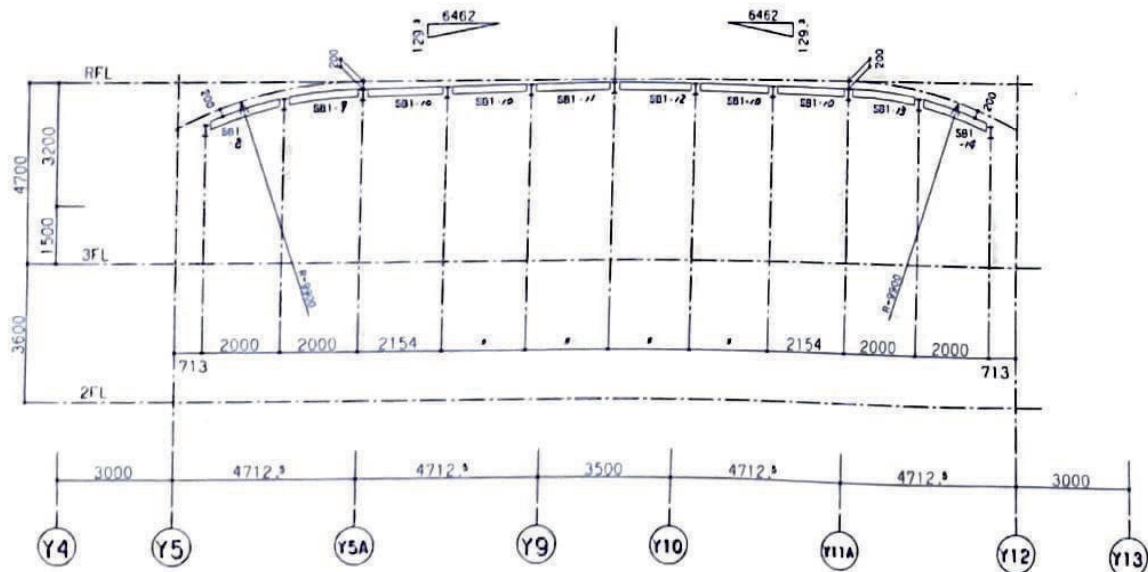




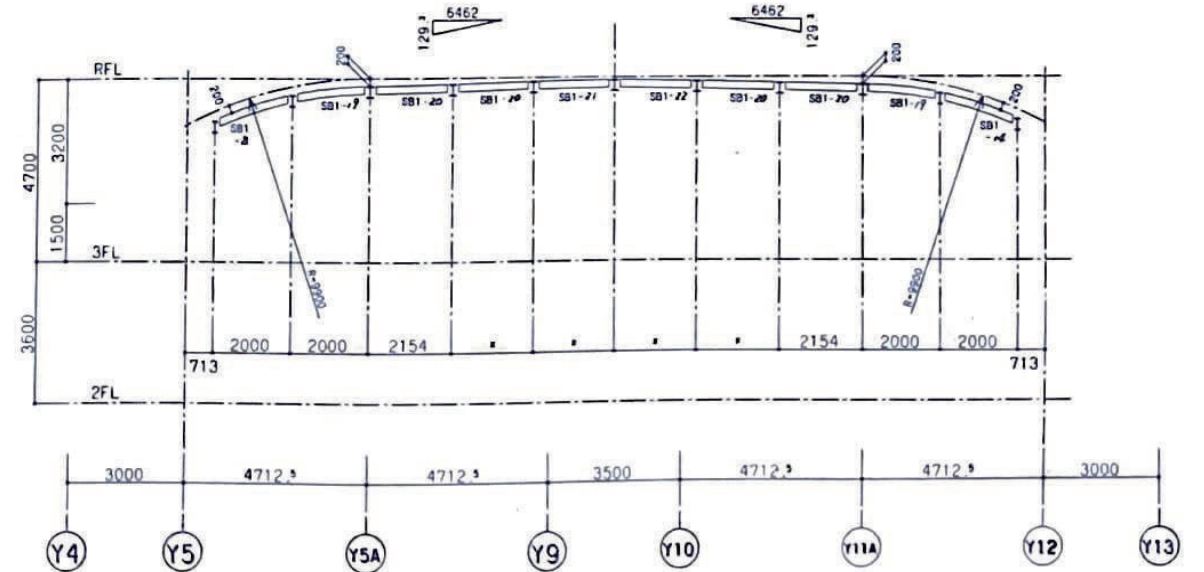
X3-X5 間軸組図



X6-X7 間軸組図

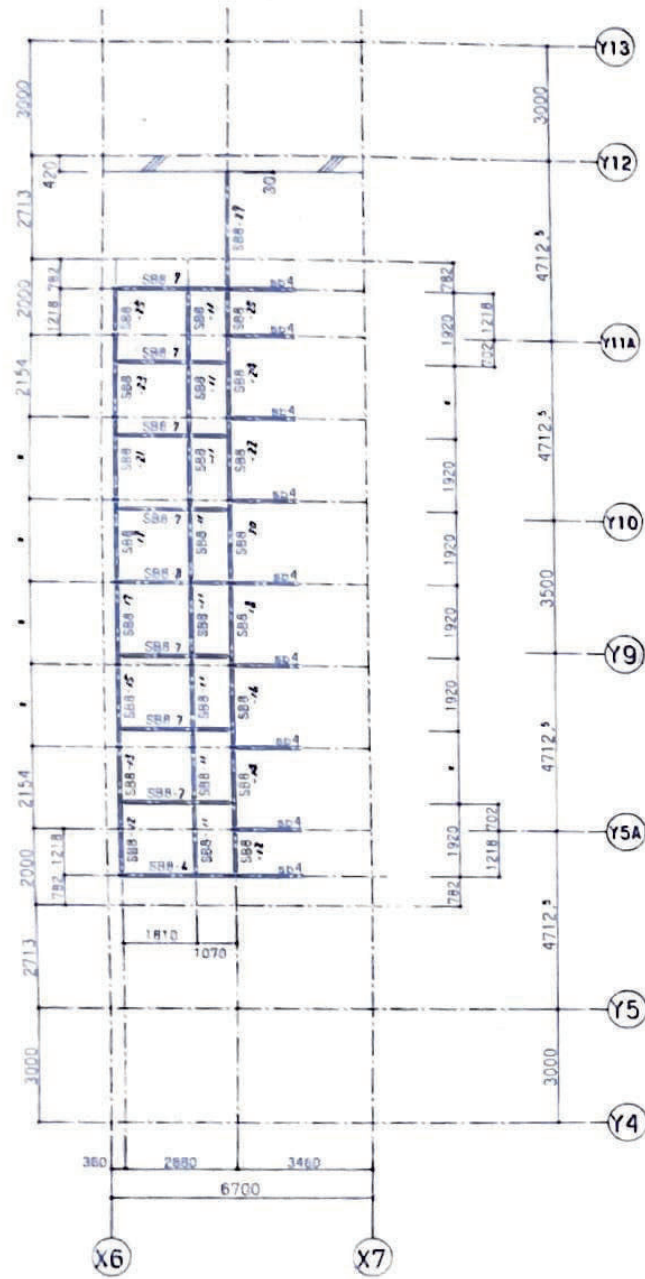


X5-X6  
X7-X8 間軸組図



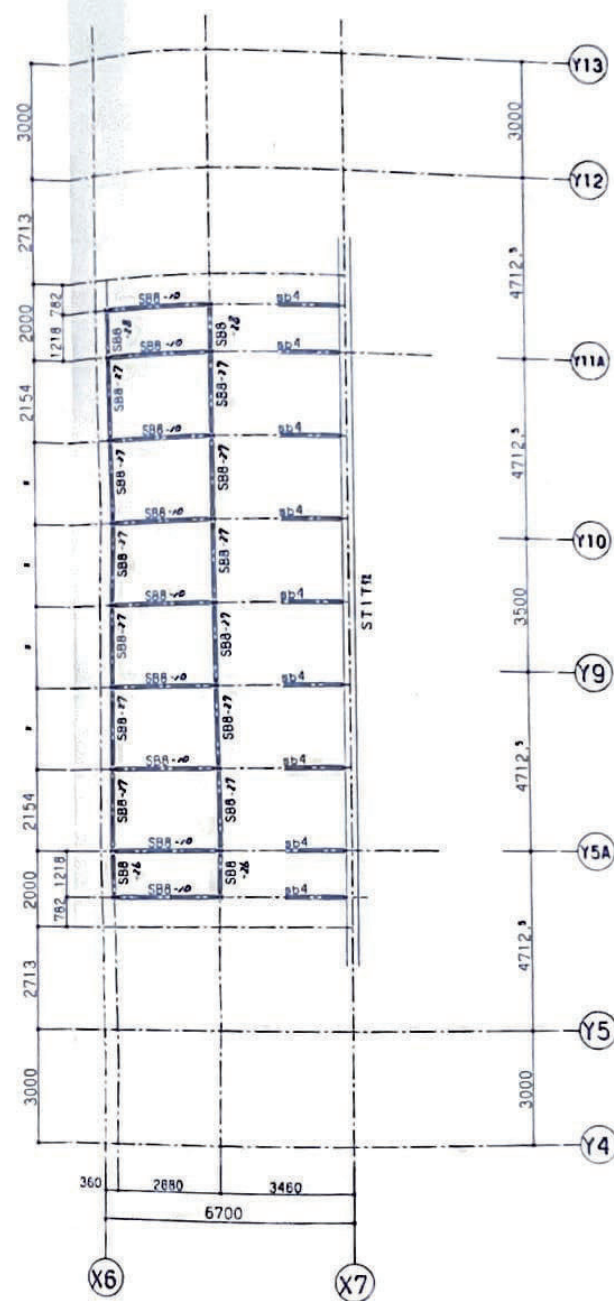
X8-X9 間軸組図



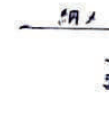


3FL+1271. 伏図

床材-L250-12

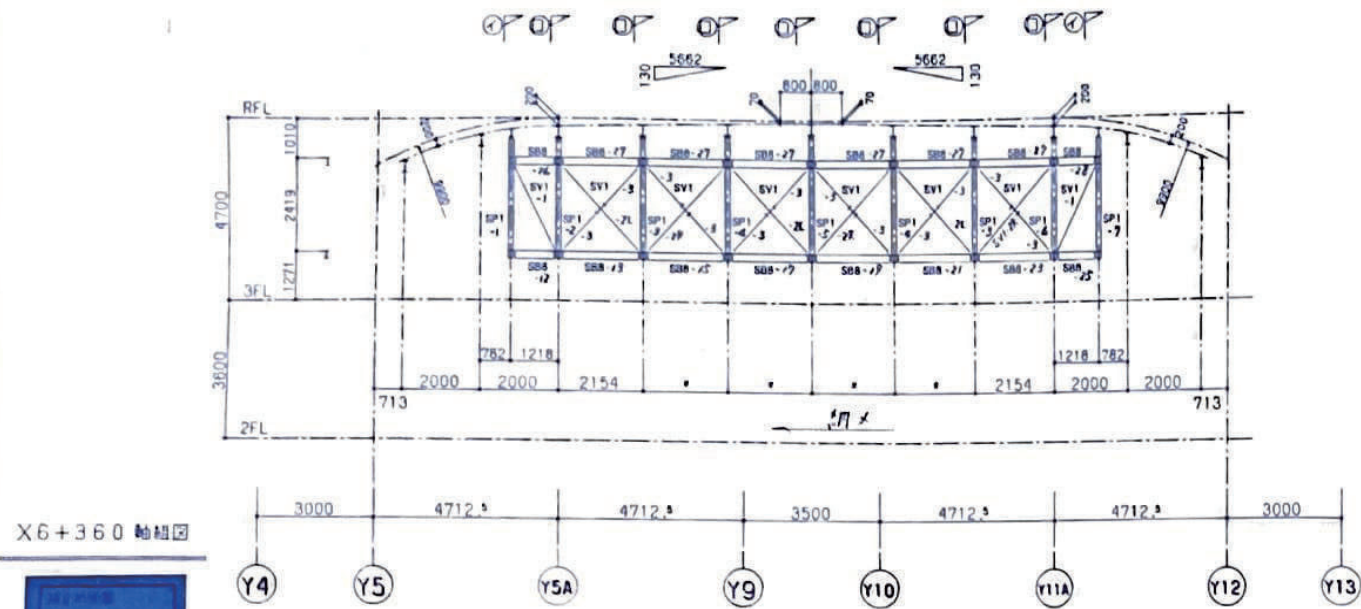


3FL+3690. 伏図

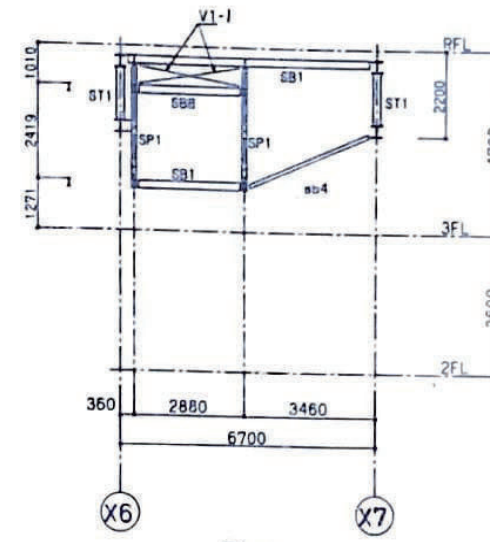


第1シーリングスポット  
梁伏図

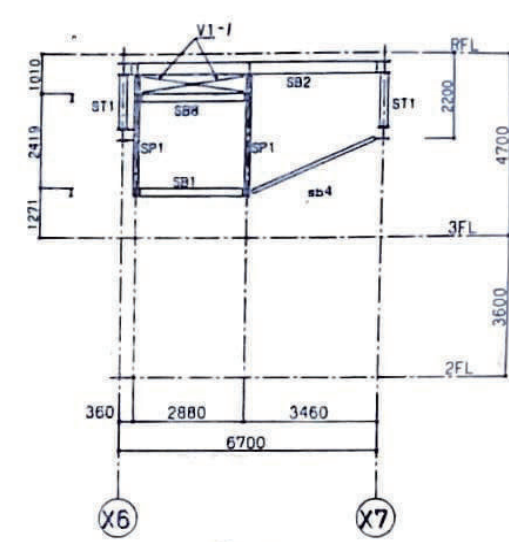
設計マーク	主材サイズ	継手マーク	備考
SB8	全新 H-198X99X4.5X7	BW8	
sb2	全新 CT-75X75X5X7	BW13	
sb4	全新 CT-100X100X5.5X8	BW14	
V1	全新 RB-16	VJ1	
SV1	全新 L-65X65X6	VJ2	
SP1	全新 H-125X125X6.5X9	PJ1	



X6+360 軸組図



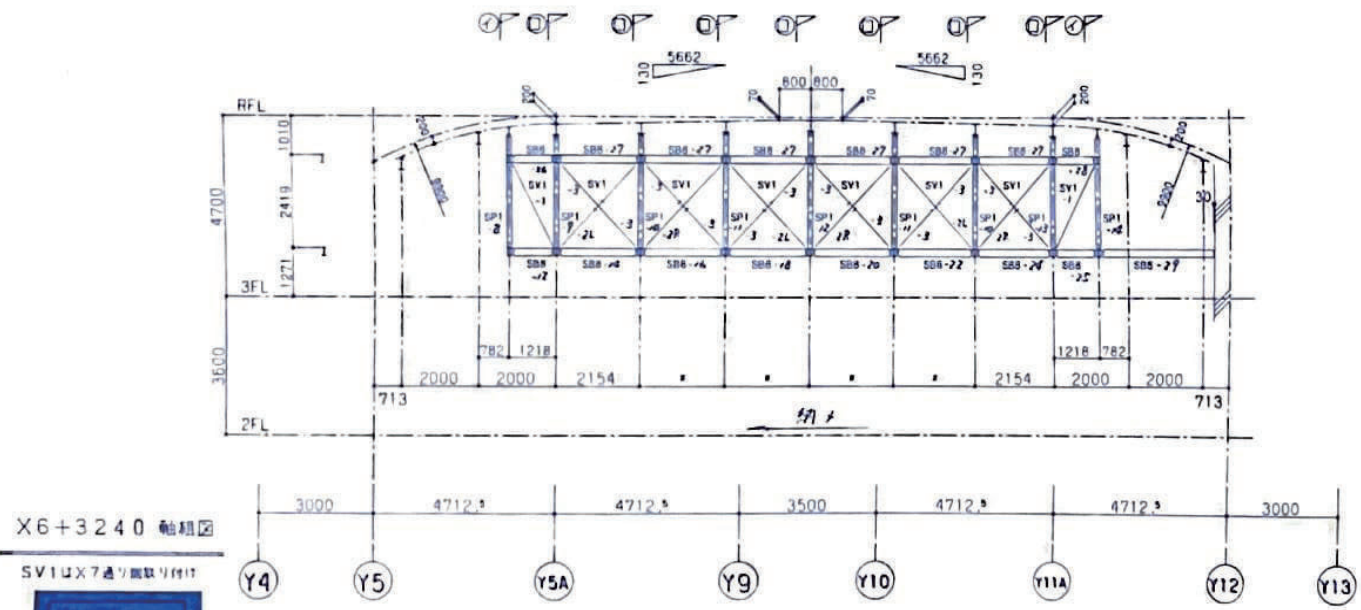
① 面



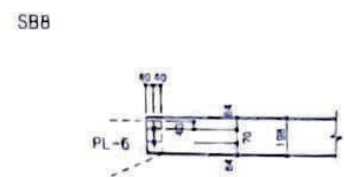
② 面



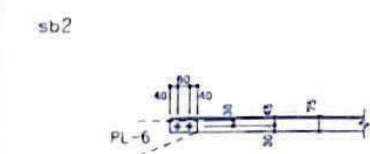
第1シーリングスポット  
軸組図



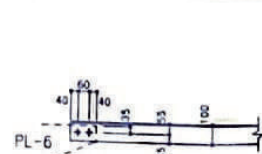
X6+3240 軸組図



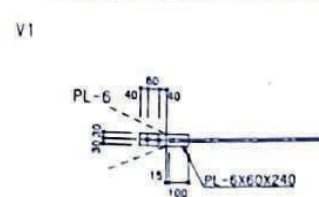
BW6 H-198X99X4.5X7



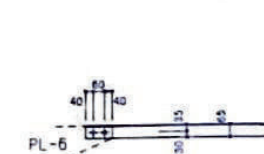
BW13 CT-75X75X5X7



BW14 CT-100X100X5.5X8



VJ1 RB-16 (ターンバックル付)

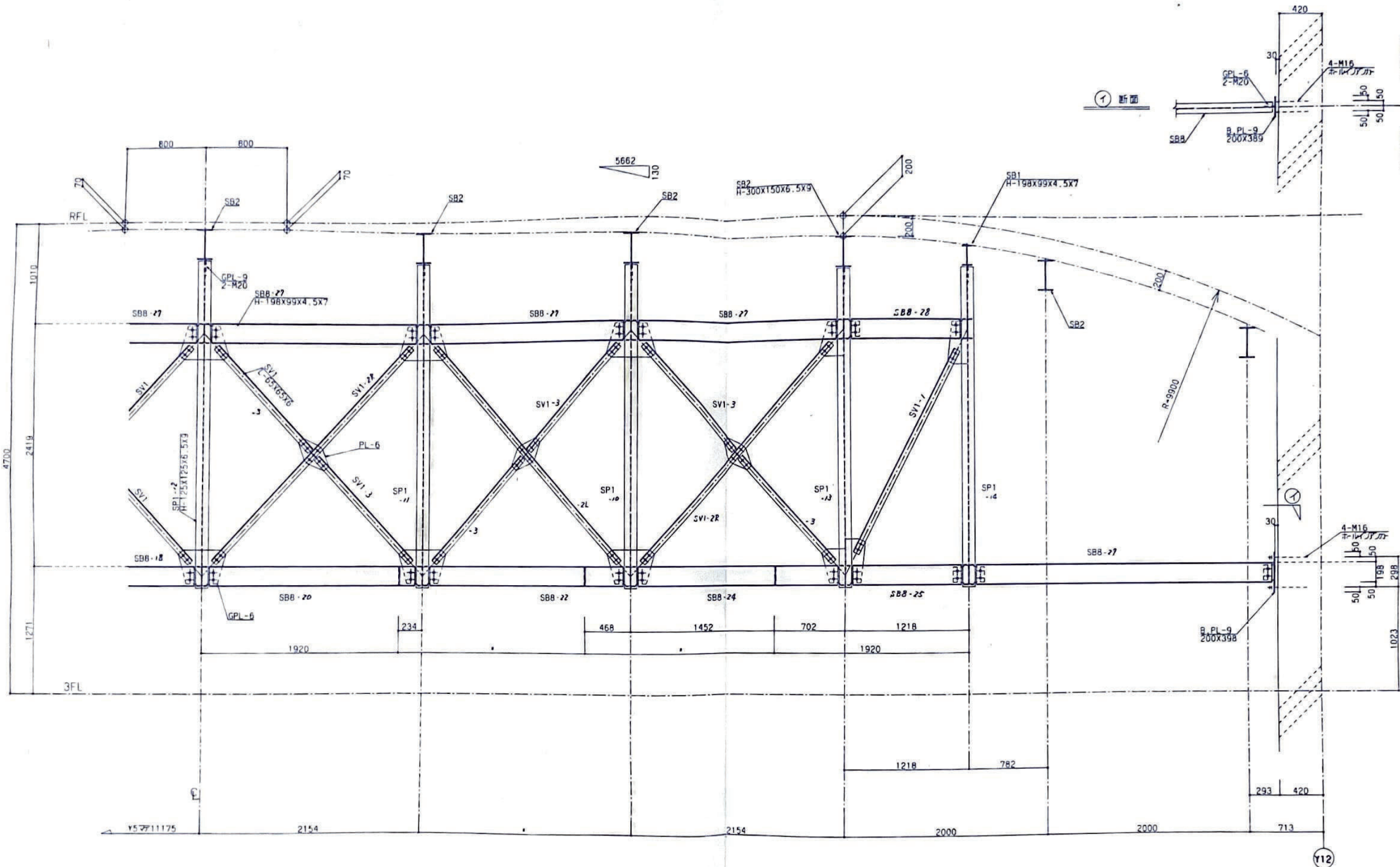


VJ2 L-65X65X6



PJ1 H-125X125X6.5X9

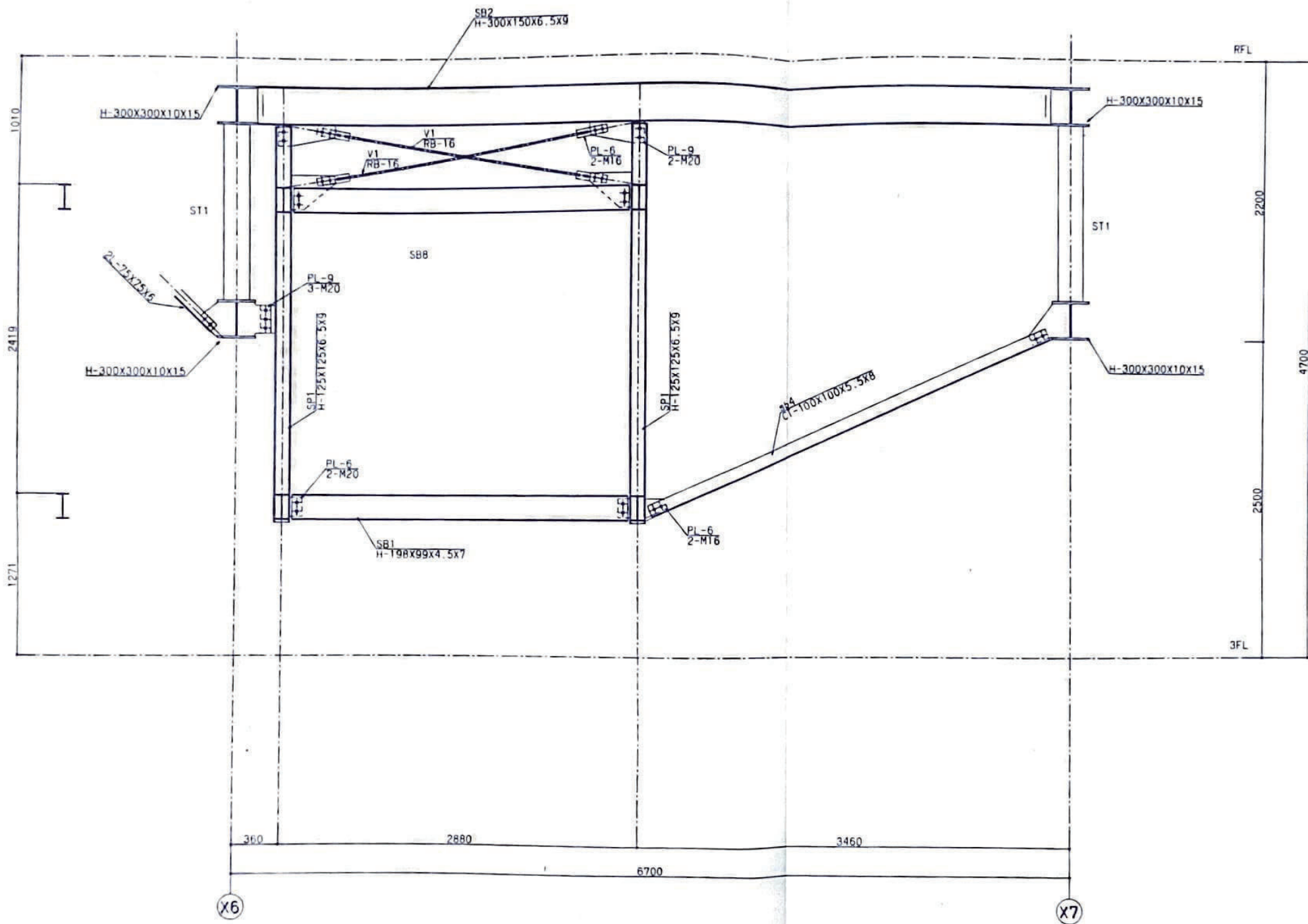
2-M20



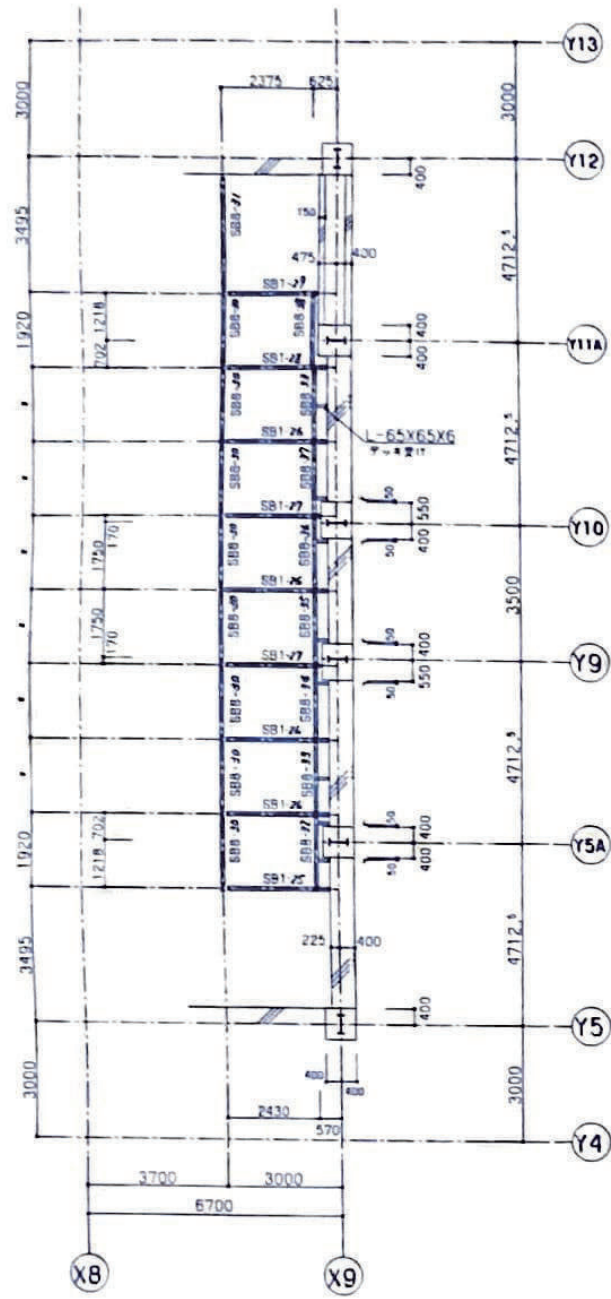
X6+3240詳細図

SV1はX7通り面取り付

履歴 完成図作成 (発注者名) 日付 監理技術者 担当者	完成図承諾 日付 監理者 担当者	法適合確認 構造設計一級建築士 証交付番号 第 本図 (住継書)に記載された事項は、構 造適合規定に適合することを確認した。 構造設計一級建築士 証交付番号 第	法適合確認 設備設計一級建築士 証交付番号 第 本図 (住継書)に記載された事項は、設 備適合規定に適合することを確認した。 設備設計一級建築士 証交付番号 第	製作日 20**.** ファイル名	代表設計者 一級建築士 大臣登録第311349号 中村 慎吾 日付 20**.**	設計者 一級建築士 大臣登録第339946号 堀田 圭那子 一級建築士 大臣登録第278988号 吉村 桂	業務名称 令和8年度 長泉町文化センター大規模改修工事 業務契約コード 108484-02 図面名称 既存図面 ホール第1シーリングスポット詳細図-1 縮尺 A1 A3	図面番号 S-16	管理建築士 一級建築士 大臣登録第340068号 本村 雅昭
--	---------------------------	--	--	-------------------------	--	---	--	--------------	---

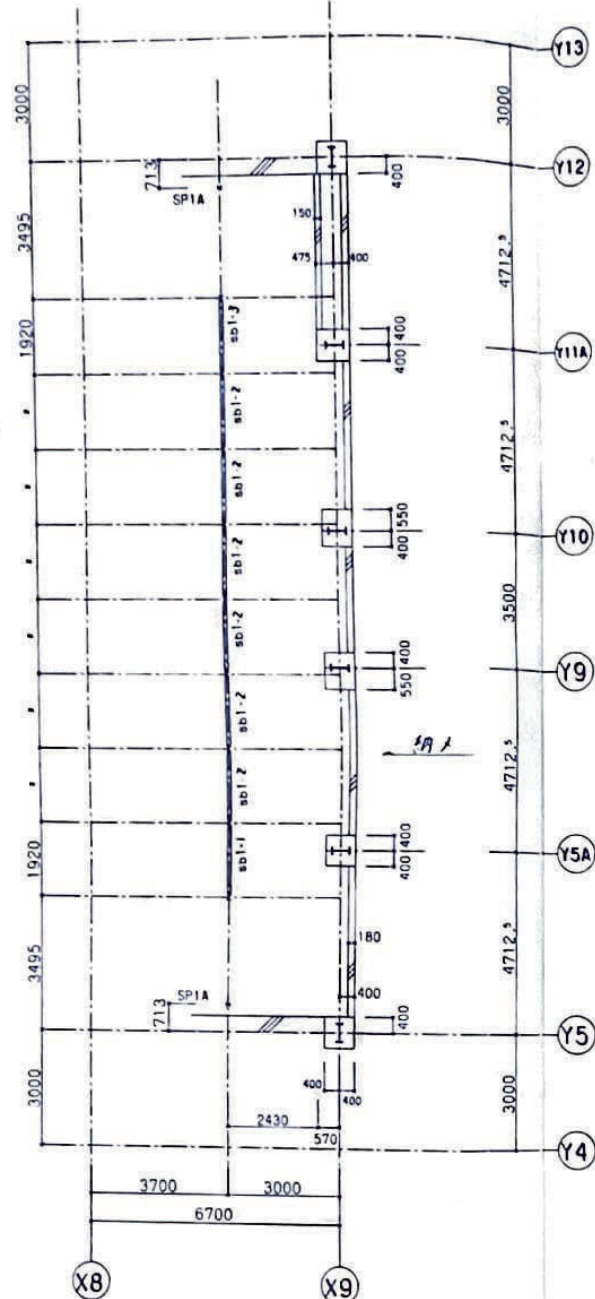


1 面詳細図



3FL+951 伏図

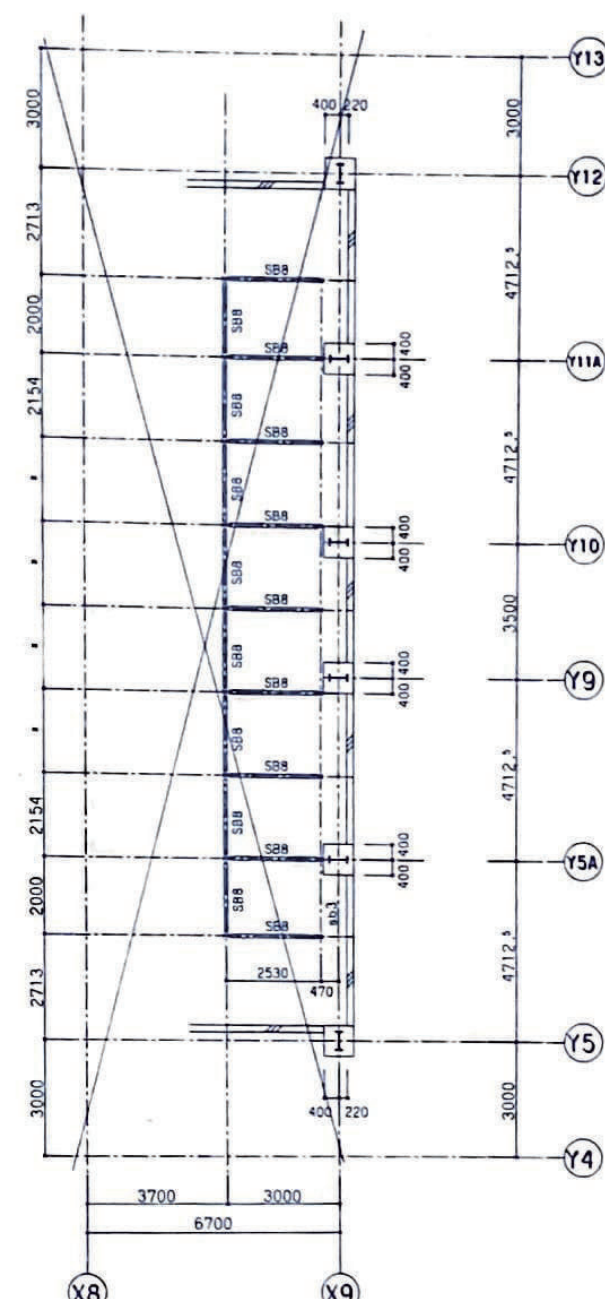
図号 = EZ-50-1.2



3FL+2540 伏図



第2シーリングスポット  
梁伏図

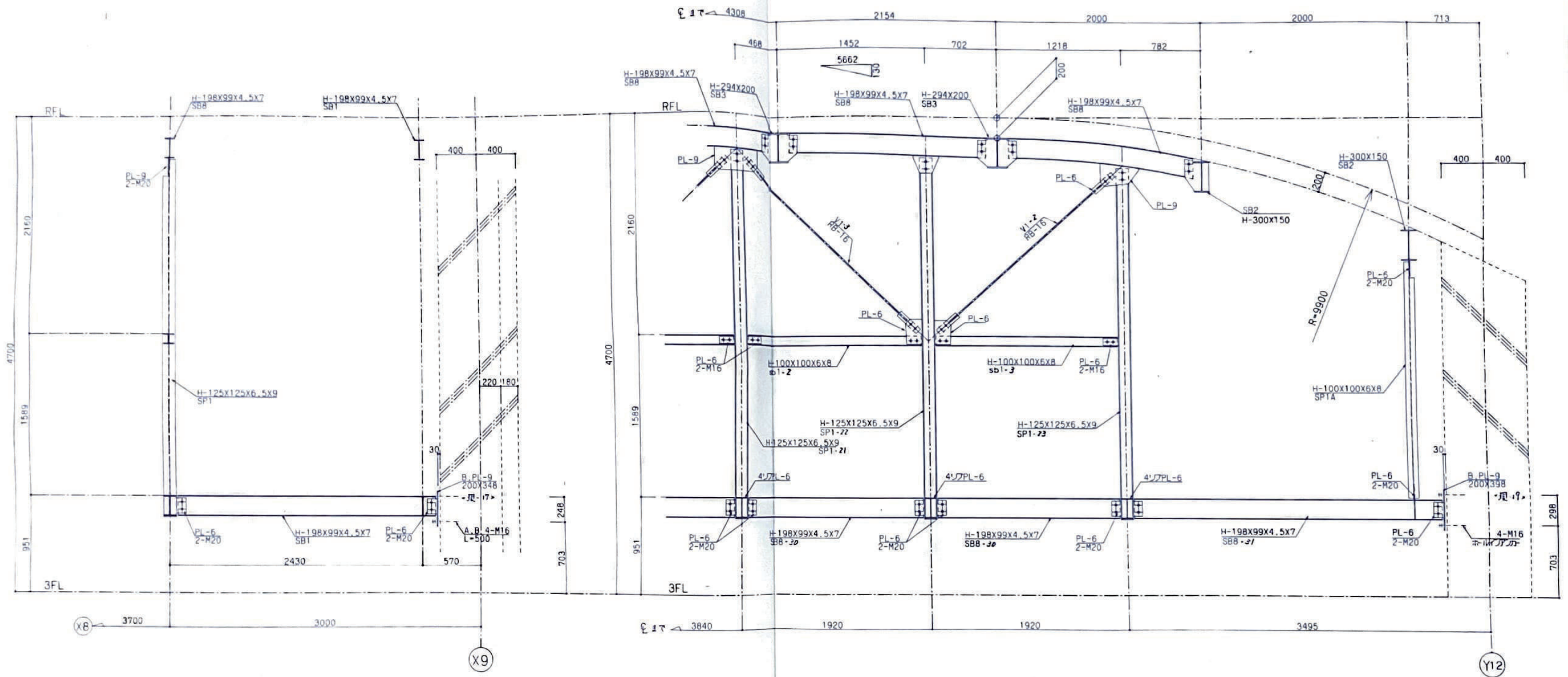


3FL+3470 伏図

中止

設計マーク	主 材	サ イ ズ	継手マーク	備 考
SB1	全断	H-198X99X4.5X7	BW1	
SB8	全断	H-198X99X4.5X7	BW8	
sb1	全断	H-100X100X6X8	BW12	
sb2	全断	CT-75X75X5X7	BW13	
sb3	全断	I-200X80X7.5X11		
V1	全断	RB-16	VJ1	
SP1	全断	H-125X125X6.5X9	PJ1	
SP1A	全断	H-100X100X6X8	PJ1A	





X9-3000詳細図

履歴 完成図作成 (発注者名) 日付 監理技術者 担当者 ver.20190401	完成図承諾 日付 監理者 担当者	法適合確認 構造設計一級建築士 証交付番号 第 本図(仕様書)に記載された事項は、構 造適合状況に適合することを確認した。 構造設計一級建築士 証交付番号 第〇〇〇〇号	法適合確認 設備設計一級建築士 証交付番号 第 本図(仕様書)に記載された事項は、設 備適合状況に適合することを確認した。 設備設計一級建築士 証交付番号 第 号	製作日 20**.** ファイル名	代表設計者 一級建築士 大臣登録第311349号 中村 慎吾 日付 20**.**	設計者 一級建築士 大臣登録第339946号 堀田 圭那子 担当者 一級建築士 大臣登録第278988号 吉村 桂	業務名称 令和8年度 長泉町文化センター大規模改修工事 業務契約コード 108484-02 縮尺 A1 A3 図面名称 既存図面 ホール第2シーリングスポット詳細図	図面番号 S-20	管理建築士 一級建築士 大臣登録第340068号 本村 雅昭
--	---------------------------	--	--	-------------------------	--	--	--	--------------	---